毎月一回
十五日發行

家庭雜誌

重要目次

第百拾五號

大日本女學會

總裁 小松宮妃殿下

●本會賛成員は有栖川宮大妃殿下　華頂宮妃殿下を始め奉り貴婦人方九十四名

副總裁 鍋島侯爵夫人

趣旨

本會の趣旨は女子教育の普及發達を圖らむがため女學の講義錄を發行し入學すべき女學校の設けなき土地に住める者又は父母のもとを離れ難き事情ある者をして居ながらに通信教授を受けしむるに在り其講義は極めて平易懇到を旨とし實踐の用に應じ輕佻の風を避け以て賢良貞淑の品性を涵養せむことを期すされば此講義錄は學ぶべきよすがなき者の師友となり一家の主婦として齊家保育の任に當る者の指針となり女學校に入學し居る者にも參考書として適當なり●本會は明治廿八年の創立にして三千の會員已に第一回の講修を終りたれば今や新に學科を增設し紙面を刷新し更に第二回講修期を開き新に

會員と募集す

志ある淑女達とく入會あれかし何時入會あるも第壹卷より送本差支なし●本會講義錄は女學講義と稱し畏くも　皇后陛下叡覽を給ひ特に大御歌下賜の光榮を辱うす一卷の紙數菊判二百頁以上の優美なる大册子にして毎月廿五日發行す總て講義の質問に答へ歌文習字の添削批評をも爲す●會費一箇月卅錢束修卅錢●會則希望者は郵券武錢添へて申込みあれ●

學科及び講師

●修身(女子修身談)細川華族女學校長か從來同校に於て演說せられたるものに係る(禮法)佐方女子高等師範學校教諭●國語(國文)關根學習院教授(作歌)大口御歌所錄事(作文文法)今泉城北中學校長●漢文、土屋華族女學校教授●歷史(日本歷史萬國歷史)大森文學士●地理(日本地理萬國地理)喜田文學士(地文)脇水理學士●理科 物理化學)近藤工學士(博物)石川理學博士(生理衛生)未定●家事(家庭教育)三輪田高等女學校講師(家事經濟)後閑女子高等師範學校教諭(家事衛生)三宅醫學博士(小兒衛生)三島醫學士●割烹、御園華族女學校教員●小兒心理學、下田文學士●裁縫、渡邊東京裁縫學校長●習字、坂華族女學校教授●音樂、未定●手藝(活花點茶)川邊東京女學館講師

附錄

●史談、下田華族女學校學監●小說、逍遙學海紅葉三大家●お伽譚、漣山人●詞藻●質問應答●雜錄●雜報

●目下第五卷迄發行せり

東京市麴町區土手三番町二十八番地

大日本女學會

奇應丸

定價○瓶入五十錢○大包廿錢○中包十錢○小包五錢

◎主治効能◎

御小兒衆の虫のやまい○五かんきやうふう○痫いたみ○はら下り○しやくつかへ○船車のよい○酒の二日よい○はしか○ほうそ○產前產後はよろしからず

◎効驗の顯著にして而かも賣價の低廉なるは普く諸君の知らるゝ所願くは御試用の上倍々御高評を賜らん事を伏して奉願上候

東京日本橋通一丁目（電話本局四百七十五番）

白木屋

大村彦太郎謹製

特約店

東京市神田區鍛冶町　大木合名會社
東京市上槇町中通　安川榮次郎
東京市銀座一丁目　佐々木玄兵衛
大阪市東區道修町　賣藥御賣會社
其他全國の賣藥店に差出し有之候

江戸と東京

森三溪編

故西郷隆盛、故大久保利通、及勝伯の肖像挿入

定價十錢　郵税二錢

恰も奠都祝賀會前三日を以て本書を發兌す。書中掲ぐる處江戸城の起原より徳川時代江戸市中の風俗、習慣、民種、市劃、祭禮、冠婚、年中行事等細大遍さず加ふるに勝海舟伯の談にかゝる江戸城受渡の實話を以てす。行文平易、振假名付極美製冊子にして奠都祝賀會に參したる人の紀念として家族親戚に贈答するなどは最も恰好の著作たる也。

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

◎文學士 幣原坦編

女子教育

洋裝美本 全壹冊
定價金二十五錢
郵稅金四錢

輓今女子教育は漸く人の口吻に上り茲に好書を待つもの丶如く相見え申候然るに偶々坊間に散見するものあるも多くは一家言の類にして渺茫幾百年の昔より歷史的に說きたるものは歐米の書にも嘗てこれなきにや承知致し候處幣原坦先生東西古今の女子教育の通觀し之を**歷史的に述作**して稿を脫し候趣に付き乞ひて之を一見せしに實に斬新の書に御座候ひき因りて弊店之を先生に請ひ得て出版することとはなり申條今や製本全く出來仕候まゝ之を發賣いたし候其第一編は**古來女子教育の趨勢**第二編は**方今の女子教育**第三編は**我國の女子教育**にして何れも諄々說き去りたるものに候へば當に好頁の教科參考用書たるべしと存候

發兌 書肆 **集英堂**
東京市日本橋區旅籠町拾壹番地（電話浪花百四十二番）

府下賣捌所
◎銀座 文海堂 服部書店
◎日本橋通 大倉書店 青木文魁堂
◎神田 中西屋 東京堂

德富健次郎著

青山白雲

定價廿五錢
郵稅四錢

「青山白雲」は名の如く青山白雲なり。短篇の小說あり。實話あり、逸事あり、紀行あり。記する所一ならずして、之を貫いて走るは白雲と青山と。百忙世界、熱閙社會、一閑地を得て心神を養はんとするの士は、幸に一讀せよ。

發行所 民友社
東京京橋區日吉町四番地

正岡子規君閲並序　下村爲山君書
高濱虚子君序　上原三川君
河東碧梧桐君序　直野碧玲瓏君　共編

新俳句

紙數四百頁定價
卅五錢郵稅六錢
挿畫四季三十葉入

新日本の生活は、多くの點に於て革新せり。政躰も革新せり。醫術も革新せり。戰術も革新せり。而して最も多く文學美術に於て革新しつゝあり。小説の如き、繪畫の如き、音樂の如き、詩歌の如き、其最も著るしきものに非ずや。

俳句に至ては革新の氣運殊に昭明較著にして、芭蕉を外にし、蕪村を外にしては數百年來、單に遊戯文字、道樂仕事、謎語的、見訓的のものとして、滔々たる天下廢人遊民の占有に歸し、文學上の價値としては何の見るべきもの無りし俳句も、今や全く、文學上高等的、獨立的、不朽的のものとして識認せられ、且製作せられんとするに至れり。而して勃然たる新派革新の氣運は、各々形勝の地に據て東西相呼應し、今や殆んど蜻蜓洲の首尾を震撼し去らんとす。豈亦た盛ならずや。

彼は芭蕉、蕪村を經て、第三期に俳神の金冠を戴かんとしつゝあり、又た戴くべきの詩人なりと、或者をして絕叫せしめたるは、俳句の革新に偉功を奏したる正岡子規子に非ずや。上原三川、直野碧玲瓏二子、聊か斯道に得る所あるを以て、暇餘同好諸子の句を輯め子規子の閲を乞ふ。子規子これを校訂する極めて峻嚴、二萬有餘の俳句、僅に三千餘を存するに至れり。則ち此書、三川、碧玲瓏二子の共編と云ふと雖も、實は子規子の選と謂て可なるに非ずや。

而して本書の繪畫に至ては、畫家にして俳句に善き下村爲山(別名牛伴)君の筆に成るものにして、意匠斬新、筆勢超忽、眞に本書の光彩を添ふに足る。

萬葉集は萬葉時代を代表し、古今集は延喜時代を代表す、數百年の舊套陳態を一掃して、明治革新の精粹を蒐集代表する者、夫れ唯本書なる哉。夫唯だ本書なる哉。

發行所　東京京橋區日吉町四番地　民友社

第十二版
一語千金
定價金十錢
郵税金貳錢

第五版
家庭小訓
定價金十二錢
郵税金貳錢

第八版
青年と教育
定價金十五錢
郵税金四錢

第十版
第一靜思餘錄
定價金十五錢
郵税金四錢

小楠遺稿
定價並製金壹圓
上製壹圓五拾錢
再版印刷中

宛然一部の維新開國史なり 其家に送る書如何に情味の掬すべきぞ 亦一部の家訓書なり
廿三年初版後永らく品切の處 四方の切望に依り今般再版に附せり

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

速記法 自宅獨習生募集
月謝二十錢 二ヶ月卒業
○規則入用者は郵券二錢を投ずべし
東京下谷區徒士町二丁目三十番地
速記學專修所

森田思軒遺著
德富蘇峯 山路愛山 校定
十二文豪 第十一卷
賴山陽及其時代
稿成り印刷中五月初澣發兌すべし續々注文を乞ふ
發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

家庭雜誌

定價表

		市外郡税共
一冊	金前拾錢	拾一錢
六冊	五拾七錢	六拾三錢
十二冊	壹圓八錢	壹圓二拾錢

廣告料 一行（五號活字廿四字詰）一行八錢

家庭雜誌 毎月一回十五日發兌

本社電話番號本局七十番

發行兼印刷人 吉崎圓吉　編輯人 金子佐平

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治三十一年四月十五日發行

家庭雜誌第百拾五號

目錄



小川一真製

愛の使

家庭雜誌第百十五號
（明治三十一年四月十五日發兌）

社説

子供に獨立の氣象を養はしむる事

蘇峯生

凡そ人として持つ可らざるは、依賴心なり。自ら稼かず、自から働らかす、自分と自身の事をなさず、徒らに人に依賴するは、決して善き事にあらず。相成る可くば、自身か一身に關するとは、自分でなすとこそ然る可れ。

貧乏人が金持の懷中に依賴するか不都合なれば、金持ちが金にまかせて、自分でなして差支なき事迄も、人を煩はすは、亦た不都合なり。昔の大名抔と申すものが、馬鹿になりたるは、其の生附き馬鹿にあらず、寧ろ馬鹿に倣したるなり。箸の上け下ろしさへ自分でせず、何事も左右の人に打ち任せ、打ち賴めば、自然に其の能力も遲鈍になるものぞかし。

されば依賴心は、貧乏人に限るものにあらず、金持にもあり。地位の卑きものゝみか、其の高位の人に平身低頭して、依賴するにあらず。高位の人でも動もすれば其の權勢に任せ、色々の事を己れより目下の人に依賴して、迷惑を懸くるとあり。例せば貧乏人の子供は乞食根性となり。金持の子供は、殿樣根性となる。乞食根性は、人は皆な我に何物かを與るものと思ひ。殿樣根性は、人は皆な我に如何なる場合にても、事ゆるものと思ふ。何れも俱に好みす可きものにあらざるは一なり。

凡そ人に欠く可らざるは、自主獨立の氣象、自治的精神なり。一個の人たるものは、貧となく、富となく、貴となく、賤となく、男となく、女となく、老となく、

幼となく、己れは己れ丈にて、成る可く人の厄介にならず、卓然として立つ心懸けが、何よりも大切ぞかし。此の心懸けあらば、如何なる不慮の災難に遭ふても、決して窮くとはなき筈なり。此の心掛けあり、貧者も貧を苦にせず、富者も富を濫りにせず、富んで驕らず、貧にして諂はず、仰て天に怍ぢす、俯して地に愧ぢず。己れが職分を盡して、良心の滿足を得るなり。而して此の自治的精神、自主獨立の氣象を養ふは、家庭敎育に於て、最も大切と云はざる可らず。吾人は世の父たり、母たり、兄たり、姉たる人々が、能く其の子や、弟や、妹に對して、其の精神氣象を發達せしむるとに力を盡し、思を竭さんとを望む。而して此の事たるや、口上ばかりの敎育にて充分とは申し難し。望む所は其の自から善き手本を出して、其の感化を及ぼさんとなり。

子供に自治の精神を起さしむるには、先つ其の一身の上より手を附けしむると然る可きが如し。例せば其の室内の掃除なり、其の夜具の出し入れなり。其の學校通の辨當なり、書籍なり、文具なりの支度の如き、成る可く自身で出來得る丈は、自身でやる樣になし度きなり。松方伯家庭敎育法の如き此の如しと、人は語りぬ。

記者は獨逸ポストダムの離宮に於て、白木作りの質素なる椅子を見たり。此れぞ先帝フレデリッキの幼時自から製作せられたるものなりと案内者は申しぬ。カーヘンゾレン家が、儉勤の風を以て、歷代相繼くの偶然ならざるを知りぬ。帝王の子、然も其の皇太子にして、大工の仕事さへ學ばしむるとは、如何にも思ひ切りたる敎育の仕方にして、自治の精神は、斯る敎育の中より發達し來るものぞかし。

一人獨立して、一家獨立し、一家獨立して、一國獨立す。一人の自主自治の精神は、家に於ては家を修め、

國に於ては國を治む。國家獨立の基本全く此に在り。豈に深く思はざるべけんや。而して其の敎育の基本は、家庭にあり。

論説

幼稚園

清水直義

兒童を敎育して善き人間となし良き國民とするは、固より學校敎育の力を多しとなすべきも、家庭敎育の力は亦決して之れに劣るものとなすべからず、殊に其の就學前の敎育は、所謂「三歲兒の魂百歲に及ぶ」との諺の如く、常に兒童に付き纒ふものなれば家庭に於いては、先づ第一に是に注意することを爲さざるべからず、而して此の就學前の敎育に二樣の別あり、即ち一は家庭敎育にして二は幼稚園敎育なりとす。

余が記述せんとする所は、主として學校敎育に關するものなれば、此の就學前の敎育に於いても、單に其の幼稚園敎育即ち較〻學校的たるものゝみに就きて述ぶべし。

一、兒童を幼稚園に入るるは可なるか

凡そ人は直接と間接との區別こそあれ、産まれて此の世に出づるや、常に間斷なく相當なる敎育を受けざるべからず、即ち兒童の未だ學齡に達せざる以前と雖も、固とより相當なる敎育を受けざるべからず、此の敎育は前にも略〻述べたるが如く、家庭の敎育若しくは幼稚園の敎育にありとす。

斯く之れを言はゞ直ちに左の疑問は生ずべし、即ち

甲　學齡未滿の兒童は之れを家庭にて敎育すると幼稚園に入れて敎育すると其の孰れを可なりとするか

乙　假りに兒童を幼稚園へ入るるを可とするも其の

年齡等に制限を立つるの要ありて存するや否や。

といふことと是れなり、

さて幼稚園の必要なるものなりや否は、只幼稚園其の物のみに考へて、決定し得べきことならず、必らずや一方に於いて家庭は能く兒童を敎育し得るものなりや否を考へての上ならざるべからず、蓋し幼稚園其の物の必要なる理由あるも、一方家庭に於いて其の事を遂げ得べきものありとすれば、あながち幼稚園の必要を言ふことと無ければなり。

家庭は兒童を敎育し得べきものなりや否といふ問題に對して、余の考へにては、

(い)通常の塲合に於いては(家庭は)哺乳期の兒童をば敎育するを得べきも其の以後の者を敎育し得べからず。

(ろ)特別の塲合に於いては(家庭は)哺乳期の兒童をば敎育し得べからず之れに反して哺乳期以後の者をば敎育し得べきものあり。

通常の塲合即ち中人社會の家庭に於いて別に何等特別の事情あるものならざれば、其の母は主として兒童の敎育に任ずべく、殊に兒童の哺乳期に在る時には殆ど寢ねても寤めても將た飮食の際と雖も、全く其の兒童の爲めに動作するものたるべければ、母にして相應なる敎育の素ある者ならんには、其の兒童の敎育は之れを行ふことを得べしとなす。然れども其の兒童較々長じ離乳の期を過ぐるときは、或は次出の兒童を得或は漸く家事全般に對して務むること多かるべきが爲めに、勢の自然として其の敎育に關し欠くる所を生ずるの虞れあり、即ち此の時期に至るときは、家庭は兒童を敎育し得ざるととなる。

蓋しかの小學校に於いて新入學の兒童に關し諸事困難を感ずるものは、職として原因を是に有するものなり。

特別の場合例へば中等以下の社會又は業躰等に依り兒童の産まるるあるも、主ばら之れが敎育保養に從事すべからざるものにありては、其の家庭は哺乳期中と雖も、兒童敎育の事を爲すこと能はざるものとす、尤も此の如き家庭の中には或は母に代りて其の兒童を敎育する者を定むるものあるべしと雖も、是れ眞正なる家庭のみにて之れを敎育するものなりとすべからず、况んや其の母に代る者の優良なるは、容易に得ることを能はざるべきに於いておや。

右に反し中等以上の社會に於ける家庭にして其の母たる者は殆ど單に兒童敎育にのみ任じ得べきものなしとせず、若しそれ此の如き家庭は離乳期以後の兒童と雖も、家庭は能く之れを敎育するを得べきなり、其の他完全なる程度に於いて母に代るに足るべき代人を定め以て家庭の敎育を施こし得べきものも亦本文に等しと知るべし。

以上述べたる所に依れば左の如き決定を得べし即ち

一　左の場合に於ける兒童は之れを幼稚園に入るゝを可とす

(い)通常の場合なる家庭に於ける哺乳期以後の兒童

(ろ)特別の場合に於ける家庭にて敎育し得べからざる總べての兒童

二、如何なる幼稚園にても兒童を入れて可なるか

如何なる幼稚園にても兒童を入れて可なるや否を知らんとするには、一方には兒童の入學年齡に達せざる以前は其の心身の情況果して如何なるものなるやを知り、又一方には幼稚園とは果して如何なるものなるやを知らざるべからざれば、頗る容易ならざれども左に簡單に此の兩方に付きて述ぶべし

人の幼年の際にありては、其の身躰の發達頗る旺盛

なるものにて其の總べての作動等極めて簡單なるものとす、それ故に寧ろ生活力は主に身躰の發達の方に費され、其の總べての作動の方には割合に少き生活力を用ふるのみゆゑ人爲を以てすると疾病等よりするとに論なく身躰の作動の爲めに割合に多くの生活力を費さしむれば、自ら身躰の發達に對して妨となるを免かれず、此の事たる實は壯年者になりても同樣なる情況なしとせざれども、年の益々幼なるに從ひて影響を及ぼすこと愈々甚だしきものと知るべし。

されば幼年者を教育すべき幼稚園なるものは必ずや此の理窟より割り出だされたるものならざるべからず故に眞正なる幼稚園の有すべき要件は、

一　母に代りて兒童を保護し教育するの實を具ふるものなる事

二　身躰の發達を助長するの實あるものなるべき事

三　生活力を心身の作動の爲めに過費し身躰の發達を阻碍するものならざるべき事

四　心意の作動を適宜に助長するものなるべき事。

大凡此の如し之に付きて二三の例を擧ぐれば、

一　人の母たるの道を知れる保姆を有するもの、心底慈愛心を有する保姆あるもの、人身の生理及び心理に通じ且教育の方法を知れる保姆を有するもの。

二　適宜なる家屋庭園及び器具等の設備あるもの、適宜なる運動遊戯の方法等の備はれるもの。

三　心身を過勞せしむる動作を爲さしめざるもの、兒童の健否長幼に依り相當保育法に斟酌を加ふべき方法あるもの。

四　適宜なる方法手段に依りて心意の發達を助長する課業を爲さしむるもの、運動遊戯の間に於いて心意の發達を助長する方法注意の加へらるゝも

の。

とは其の大要なり、若しそれ更に細かく之れを說かんとするときは殆ど際限なければ概要に止めん

兒童を入れて能く其の保護敎育を誤まらざるべきものは實に此の如き幼稚園即ち眞正なる幼稚園ならざるべからず、故に此の如き幼稚園ならざれば兒童を入るることを可なりとすること能はざるなり。

然るに今の我が邦に存在する幼稚園には往々にして右の如くならざるものあり左に其の數者を例擧せん即ち

(一)母たるの道を知らざる少女をして保姆たらしめたるもの、辛ふじて僅かに文字を書し得る位の者を保姆としたるもの、御役目に保姆の事に從ふものある事。

(二)家屋狹隘空氣の流通あしく光線の具合よろしからざる室内にて遊戲せしむるもの、着坐して姿勢を正さす机に凭らしむるもの、腰掛を用ひて冬時に於ける防寒の備へなきもの、諸器具の光射格構に少しも注意することなきもの、(三)強いて恩物を使用せしめんとするもの、強いて製作物を成さしめんとし出來ざれば保姆之れを作りて出來たるが如く裝はしむるも、甚だしきは文字を敎へ算法を敎ふるに至るものあり。(四)西洋傳來の器具を用ひ又は其の方法にのみ依り少しも其の我が邦の兒童に適するや否を考へざるもの。

我が邦の現在に於いては右の如きものあるがゆゑに兒童を幼稚園へ入れんとする者は、須らく先づ其の幼稚園の眞正なるものなるや否を視て、然る後其の眞正なるものに入らしめんことを期すべきなり。以上は現在の幼稚園に就きて之れを言ひたるものとなす若しそれ更に詳說するときは前に述べたる處に基き左の如き幼稚園あらんことを欲す即ち

一　中等以上の社會の兒童を入るべきもの

二　下等社會の兒童を入るべきもの

三　右兩者の各に於いて哺乳期なる兒童を入るべ

きもの。
の三種とす。然るに今は其の實右(一)のものゝ外なし、教育上頗る欠典なりとなせども是れ亦別に幼稚園の事を說く時に於いて述ぶべし

因みにいふ現在の幼稚園にては大抵滿三歲位より以上の兒童のみを入れ學者も亦之れを適當なりとすれども、余の考にては保護敎育の方法さへ適宜なるものあらんには、哺乳期の兒童と雖も之れを保育し得べきを信ずるなり、尤も今の幼稚園の多くのものゝ如くにては哺乳期の兒童は勿論滿三歲以上の兒童にても安心して入園せしめ難きものあり、世人須らく大にのみ走らずして、此の小者をも改良せんことを期すべきなり。

數學的智識

桂陵生

凡そ萬般の事に於て秩序と云ふも、規律と云ふも、節儉と云ふも、清洒と云ふも、畢竟は數學的智識の副產物にして、一家の家庭に、秩序、規律、清洒、節儉の其の一つだに欠くるあらば、吾人は確かに家庭和樂の三分の一は之がために消滅すべきを信ず、日本人が古來餘りに家庭なるものに重きを置かず、是が和樂をも認識する能はざりし所以のものは、其幾分かは實に這般の條理を解せざりしに因らずんばあらざるなり。

數學を以つて單に物を數ふるばかりの學問と思ふ勿れ、數學とは凡ての學術の根本的要素にして併せて社會萬般の中樞となりつゝもあるものなり。若し其の任務をして單に物を數へ量を計るのみならしめば吾人は二二天作を知れば夫れにて可なるなり、百分算と比例の一部とを學びなば夫にて既に十分なるべし然れど

如何せん、數學なるもの丶眞趣意は此に在らずして反つて彼にあることを。スコツトランドのブレェキー氏嘗て其の自修論に說きて曰く「余は青年に向つて熱心に數學の研究をなすべき事を勸む、蓋し數學は推理に尤も必要なる所の人の心の綜合力を强ふすればなりと」。然り數學は實に人の心の綜合力を强ふし、併せて又之が解拆力を堅固ならしむ。然れば哲學を研究せんとするに當りても、先立つものは數學的智識なり、實業に從事せんとするに當りても、先立つものは數學的智識なり、自在に綜合し自在に解拆する所の力は、自然に其の頭腦を組織的ならしめ、其の眼孔を緻密ならしめ、人をして一時の感情によつて事を誤まるが如き事なく、靜思靜想、明確に事物を判斷するの能を有せしむ。かるが故に一度數學的智識の薫化を受けたる頭腦は、縦令如何なる事件の一時に輻輳し來るありとも、迷はず、亂れず、片端より徐々に之を片付けて、恰も係によつて毛絲の編物を解き行くが如く、凡てのものは此處に悉く秩序正しく、凡ての事は此處に悉く組織立ちて、毫も糾紛綜錯亂れたる麻のごときことなからしむべけん。先天的に內を守りて、萬づに緻密ならざるべからざる婦人が、男子に比して一層多くの數學的智識を有せざるべからずと云ふも、亦此の大關係の存するあればなり。

算術を知らざる一家の主婦が、日常鎖末の事故に於てすら、往々にして過誤違算を生ずるは云はずもあれ。一家の中に規律なくして、妻のなすべき職分も夫のなすべき職分も、全然混同して判じがたく、懲戒賞與の法さへ明かならずして、下女と下男と稍もすれば其の職權の衝突を生ずるが如き。確然たる時間割の定められざるがため、今日の仕事と明日の仕事と互に相綜錯して、知らず識らず非常なる手違を生じ、或は一定の時限に一定の業を盡す能はずして、空しく時を

毀し去るが如き。物を各其の處に置かざるがため、器具は散亂し、圖書は紛雜し、肝要の書付を紙屑籠に投げ込み、大事の時計を池の中に轉がし落すが如き。一つとして其の源は數學的智識の欠亡に歸せざるを得ず。若し夫れ家政會計の點に至つては、收入を以つて支出を制することを知らず、空々に取り込み空々に拂ひて、其の結果借金取りの責めはたる所となるもの、今の多くは滔々相率ゐて此の流のみ。豈に思はざるべけんや。此の外父子兄弟主從の間に秩序なくして、子は父に狎れ、弟は兄に驕り、禮儀なく作法なく、主僕の區別さへ辨ずる能はざるが如き。或は俗に所謂不性屋なるものが、着物は扱ぎッ放し、膳椀は食ひッ放し、玄關に小供の下駄の拔ぎ棄てられたるあれば、座敷に玩具箱の轉倒せるあるが如き其の直接の原因は或は他に存すべきも、其の間接の原因に至つては、吾人又たこれを數學的智識の欠亡に歸せざるを得ざるなり。

此の故に歐米に於ては、子弟を教育するに當りて尤も重きを數學に置き、幼き時よりして其の頭腦を組織的ならしめんと勉めつゝあり。殊に其の大學教育の如き時間の大半は之を數學と文學とに割與して顧みざるなり。蓋し文學は人の品性を養ひ其の理想を高からしむる所のもの數學は人の、理性を養ひ其の思想を密ならしむる所のもの、兩々相待つて此處に完き一個の人を造り出すべければなり。宜なる哉、彼等の家庭のより多く秩序正しくしてより多く又組織立ちたるも。彼等が其の職務分擔の規定を置くや、夫は妻の權限内に立ち入るを得ず、妻は夫の職權を犯すを得ず。金錢收受の間に於ても、嚴に其の權利を守りて、吾人には餘り他人行儀に過ぎはせずやとの杞憂を抱かしむる事さへあるなり。然れど忸怩痴戯は未だ以つて眞成に愛情の發露せるものと稱すべからず、互に嚴格に互に謹肅に、

禮を盡し僕を治めて、此處にはじめて家庭の和樂なるもの、存するを知らば、彼此の優劣論ぜずして又明かなるものあらん。加之、其の起臥するや一定の時あり、其の飲食するや一定の最あり。何時の幾日には此の事をなすべく、何時の幾日には夫の事をなすべし、遊覽は何曜、應接は何曜と、預じめ時間割を定めて事をなし。其の會計の如きも、政府が毎年豫算を立てゝ議院の討議に附する如く、收入若干、支出若干、本月は斯く斯くの物を求め、斯く斯くの物を造り、斯く斯くのものに若干金を投ずべしと定めて、之れより以外は臨時議會を召集するか、緊急勅令を以つてするにあらざれば支出すること能はざらしめ。其の什器も甲は甲、乙は乙と必らず其の當に置くべき所に置きて、書齋には圖書の目錄あり、納戸には衣裳の目錄あり、重寶器はそれ〳〵索引を附して之を藏めしめ、時に臨んで間誤つくが如き事なからしむ。斯くして此處に家庭は始めて家庭らしく、其の間に處するの樂も亦一方ならざるを覺ふべきなり。我が日本の家内の如きは未だ眞に彼等の所謂ホームと稱すべきものにあらず、從つて其の和樂と云ふが如きも實に少小たるを得ざるなり。吾人は思ふに此處に至る毎に。常に數學的智識の有無の、連關する所極めて廣く且つ大なるを氣かずんばあらざるなり。

諺に曰く、一家は即ち一國なりと、國にして組織なく、秩序なく、規律なくして立つ能はざる以上は、家庭の亦組織なく、秩序なく、規律なくして立つ能はざるは明白なる事のみ。既に組織なく、秩序なく、規律なくして立つ能はずんば、此が母たり、此が父たり、はた又之が造物主たる所の數學的智識の必需、豈言を待つて而して知りうべきのみならんや。

吾人は我が日本に願はくは家庭と稱すべき家庭のあれかしと思ふの切なるより、茲に數學的智識の普く其の

間に及ばん事を望む。眼に見ゆる所の効著るしからずとて、大事を輕々忽視するあらば、大ひなる悔の必らず至る日あるべけん。

史談

古寺の鐘（詩人シルレルが事）

湖處子

一簇高く繁りたる常盤の木立にマルベツクの小さき村は埋められて、人家は見えねど、朝夕立騰る生活の炊煙に、こゝにも人知れぬ村里ありと、遠見の旅客は覺るであらう。

固より風景の見るべきものはなけれど、清き流のチッカー川は、絶えず樂しき音をたてゝ、この村を過ぎ、美しき葡萄園を廻り壯麗なる古城を抱きて、ライン河へと急いで居る。

頃は秋の末つ方で、かなたこなたの森林は早や思ひ〳〵に色づきそめ、風は追々暴く、けたゝましくなつて來る、居民は早や冬籠の準備にとりかゝる。

日の足は日に日に短かくなつて來る、照る日の影は段々薄く力なくなつて來る。空氣は凝結る、晝の日中に戶外に出ても薄暮の樣に思はれる、これでは、むさくるしい戶の內が思ひやられる。

村の端末に一軒の家が有る。家に一つの窓がついて居る。その窓が眺望に乏しい樣に、この家に住んでいる家族は至て貧乏である。が皆性質が順良で勤勉で、その胸底に藏めたる敬虔の心は幾萬の黃金にも代へられぬこの一家の財産である。彼等は毎日神に祈禱を捧げて一人の小供の惠まるゝのを待つて居た。間もなく母は身重になつて產蓐に臥する身となつた。毎朝撞き出す古寺の鐘は家より家を傳はつて母の寢覺を訪づれる。母はこの鐘の音をきく毎に、常に熱心なる感謝祈

禱を捧げた。母の信仰をかく固めたのは半ばこの鐘の力といつてもよい。子は遂に生れた。古寺の鐘は村より村にこの一家の慶音を傳へんとするかの樣に例日よりは一層勇ましく鳴り響ひた。父は其子を抱いてキッスし、千七百五十九年十一月十日神我儕に一人の男子を惠み玉ふと聖書に記した。間もなくヨハン、クリストッフ、フリドリッヒ、の名によりて洗禮を受けた。

マルパックの寒村に生れたるこの憐れなる嬰兒の上に如何なる運命の神が見舞ふべきか。當時の人は勿論、渠の誕生を祝ひ壽きし古寺の鐘も恐らく彼の未來を預言することは出來なからう。

小供は追々生長する。彼の智識は世と共に段々開けて來た。この時兩親はさる事情のため懷かしき生れ故郷を捨て、兒を携へて他の村に移轉つた。母と其兒と再びマルパックの村を訪づれた時は其より數年の後の事で、其時小兒は僅かに六歳であつたが、彼は既に聖書によつて多くのことを學び、また讃美歌を母の口より習ひ覺えて、不充分ながら歌ふことが出來る樣になつてをつた。夜は小き寢臺の上に靜坐つて父が讀み行くクロップストックのメシヤを聽くのが何よりの樂しみであつた。そして萬民の罪を負ひ十字架の露と消え玉ひしクリストの爲めに渠は姉と共に一夜を泣き明した事があつた。

最初彼等がマルパックを訪れし時迄は、まだ年月の經たない故でもあらうが、この村に左程の變化は見えなかつた。が寺領の墓地には見慣れぬ新らしい墓が幾個となく立並んで居た。そればかりではなく寺門の後の草叢に大きな釣鐘が轉がつているのを發見した。この釣鐘が何故此處に捨てられてあるかと云へば、鐘樓より墮ちて龜裂を生じ早や役にたゝぬ樣になつたからである。母は幾百年來この鐘が、如何に忠實に働きし

か、またこの鐘が結婚式の朝に如何に樂しき聲を發したか、葬式の夕に如何に悲しき音を立てたか、火災の時、如何にすさまじき響を起したか、またこの鐘が如何に久しく人生を歌つたか、其他この鐘に關する歴史を逐一語つた。この時の母の言葉は如何に深く渠の胸に印銘を與へしかは渠が後年に至つて有名なる「鐘の歌」をうたつたのを見ても明かである。母はまた如何にこの鐘が不幸の時に彼女を慰めしか、悲しみ苦しみの中より如何に彼女を救ひ出せしか、またその愛兒の生れし時この鐘が如何に樂しき歌をうたひしかを語つた。この數語が如何に深く渠をして感せしめたか默然として聽いて居た小兒の眼よりは感謝の涙が溢れ出た。そして、氷や樣に冷たひ錆た釣鐘の額にその熱き朱唇をあてた。

枯れたる肉、赤く澤ある頭髮、殺たる頬、班點ある顔、これ貧困窮乏の中に育つたる渠が面貌である。淵の如く深く沈んだるその眼眸か明かに渠が非凡の才氣を現はして居る、この有爲の少年は今如何なる運命を摑まんとするか。

幸か不幸か渠は止むを得ざる義理に迫まられ恨を呑んで陸軍學校に入ることゝなつたが、壓制的校則と、器械的敎育は益々渠の不平憤悶を加ふるばかりであつた。

草間に捨てられて一人として顧みるものもない古寺の釣鐘は此後何になるであらう、竈や鍋に鑄更へられて腕や皿の仲間入をするのか、但しはまたマルペックの少年の靈腕によつて美事その神音を萬里の外に傳ふる鉅器となるのであらうか、そは兎もあれ角もあれ、渠の胸底に深くかゝれる靈鐘は敎師の壓制と束縛が加はれば加はるほど、益々鳴り出して來る、渠は折々群衆の前で、鬱渤せる日頃の感懐を歌つたが、誰一人その妙韻を聞き得るものはなかつた。

一夜その國の首府に於て盛大なる宴會が開かれた。會主は皆屈指の權門豪族徒ばかりであるから、萬事萬端美を盡し善を極め、千燭萬燈白晝の如く輝きて其光は返て星宿を照さんばかりであつた。マルペックの少年が萬斛の涙を呑んで慈母と故郷を捨て、この悪むべき學校を出奔したのは、この夜の事であつた。

今や渠はかの釣鐘の樣に無宿となつた山に三年野に三年の身の上となつた。この憐れなる青年の運命に比すれば釣鐘は遙かに幸福である。金鐵もと情なく。渠が幾星霜の間、或時は孤影惨憺僅かに希望を悲劇アヒースコに繋ぎて、深林の中に分け入り。或時は事に乘らんにも一文の貯もなき長夜の旅行に、身疲れ根も盡きて道に行倒れ。或時は酒舖の樓上にあつて、酔漢痴客の放歌口論の中に埋れて苦吟し。千愁萬苦と奮闘つて身躰を毀はしたとは幾度か知れぬ程である。實に渠が出奔後の數年間の歴史は悲惨の歴史であつた。それにも關はらず、かの古寺の鐘は草叢の中に靜かに横はつて、風が吹けば吹くにまかせ、雨が降れば降るにまかせて更に無頓着である。さらばこの青年の將來は如何に。またかの釣鐘の行末はいかに。釣鐘は其聲の到底達することの出來ない遠國に運び去られた。また青年の臆底に懸りたる靈鐘は渠の眼の見ることの出來ない、彼の足の蹈むことの出來ない大海を渡り、高山を越えて、其聲は今や全世界に鳴り響かんとして居る。則ちかの古寺の鐘はペパリアに賣られた。この鐘を以て獨逸文豪の銅像を鑄造せんとの建議案が、ペパリヤの首府に於て議決せられたのはそれより數十年の後の事であつた。

其時デンマルクの國に一人の兒が居た、彼は毎日草鞋がけで造船所なる父のもとに辨當を持ち運んで居た。この兒が後にはデンマルクの花となつた。何となれば彫刻家としてソールワルドセンの妙技に驚かぬものは

世界に殆んどあるまいから。そしてマルペックの寒村に生れ、父の手によりて、クリストッフ、フリードリッヒと、聖書に錄され一時はかの古寺の鐘の如く、一個の青銅として世に逆遇せられて居た、この大詩人の彫刻を委任されたのはこの人であつた。

さて鐵は愈々鑄型に入れられた。草間に捨てられて、久しく雨露に暴されていた古寺の鐘は「鐘の歌」「オルレアンの少女」の作者として其名世界を聳動せしめたる詩傑の半身像と變形つた。かくて愈々スタットカードの宮殿の前に彼の銅像は立てられた。

晴朗なる日である。天際より吹き下す朝風に、國旗はスタッドカード街の軒より軒に翻へり。此處彼處の寺院より撞き出す鐘の音はこの祝日を壽く樣に聞える。

此處に一個の鐘がある、鳴らず響かず、儼然とし天の一方を凝視て居る。即ちこれ古寺の鐘、即ちこれ大詩人シルレル。

閨秀美談

櫻川生

ジャンダークの逸事

佛蘭西の一小村ドムレミーに一軒の小屋あり、敢て壯嚴の觀なく、敢て輪煥の美なきも、行人は足を停めて低徊去るに忍びざるか如く、兒童走卒も此れを見ては感嘆の意を表するものゝ如し、此れ何の家ぞ、異なる處は蒼然たる古色を帶びて、春風秋雨幾百年、前代の遺物なるを語るにあるのみ、知らず此れ何の家ぞ。

此れ佛蘭西を壘卵の危きに救ひたる閨秀の勇將ジャンダークの家なり、赫々たる勇名を史上に輝かせる巾幗將軍の遺物なり、一枚の瓦、一枚の板、一掬の土も皆これ歷史的懷古の種ならざるはなし、此の家千八百二十年ギラーデンと呼ぶ貧しき人の手に落ちぬ。天にも

地にも唯一の寶物は此の古屋のみ。

英國の一富豪の佛蘭西內地を旅行せるものあり、百里を遠しとせず此の歷史的遺物を見んが爲めに來りぬ、ギラーヂンは此の旅人を欵待し、具さに當年の歷史を語り、幷に此の家の由來を說くと甚だ詳し、熱心なる家主の談話に富豪の心も踊り立ちぬ、奇貨措くべし、彼は此の名譽ある遺物を得んには數千金も愛しむに足らずと決心せり。彼は家主に家の價幾金なるべきやを問へり、ギラーヂンは眞面目の相談なりとは思はざりき、乍去旅人の顏に現はれたる熱心の色は僞りなるべくも見へざりければ彼は毫もこれを人手に渡す心なき旨を答へぬ。

『如何なれば賣り給はざる、如何なれば』

『見らるゝ如き片田舍の貧しき一平民に候へば廉恥の心にも乏しく愛國の精神も缺げたりと思ひ給ふも理なり、乍去假令予如何程愚なればとてヂャンダークが雄名、其國に盡したる功蹟が程は豫てより心に銘し居り候也、去れば此村の人々も今も彼女を愛すると彼女を知りにしものと異ならず、年幼きものすらも文讀まぬ先きに其の歷史を知る次第、かゝる貴き女子の遺物を他國人に讓り渡さば予は不忠賣國の名を如何でか拒み得べきや』

『乍去予は卿に三百ギニーを與ふべし』

『ギニーとは幾何なるや知り申さず』

『七千五百フラン計りなり予はこれを卿に呈すべし』

『七千五百フランは先づ貴下に納められよ、予は此家を讓らざるべし』

『去れど一萬フランにては』

『相成り申さず』

『二萬フラン――二萬五千フランにては』

『二萬五千フランを百千度重ね給ふとも相成り申さず、予はこれを我が同胞にすら我が親友にすら賣ると

を敢てせず、況んや他國の人に於いてをや――況んや英吉利人たる貴下に於いてをや」

其日の午後なりきギラーヂンか家の前にて隣人と語りをる時、砂烟蹴立てゝ馬に鞭ちて馳せ來る紳士あり、彼等の前に來つて止まり

「ギラーヂン殿に物申さん予は大王陛下の勅使なり」

軈て馬より降り

「ギラーヂン殿、大王陛下には卿には卿か英吉利に家を賣り渡さゝりし由を知ろし召し給ひ、卿に御褒美給ふとの難有き仰なり、陛下には卿が愛するものは黄金に非らず、英吉利よりも此の國を愛するとの深きを知ろし召し給ふ、陛下は予に命じて名譽の十字勳章を齎らしめたり、いさ受け給へギラーヂン殿、這はドムレミーの一老人の胸に輝くべきものなり、戰塲に功蹟立てし武夫も卿の名譽には如かずかし、亡き勇將が遺物の爲めに、投ぜし數千金を見事退けたる勇氣は武夫の勇氣に優るとも劣りはあらざれば」

談叢

魚の話

北斗生

春風五月の晨、濃霧前山を没するの頃、溪川に鯉魚を釣る山間の少年も、夕陽水平線下に沒して餘光猶島の峯松を染むる頃、海面油の如き所、扁舟を浮べて釣を垂るゝ海濱の少年も、墨堤に沙魚を釣り、品海に鱚を漁る東都の少年も、此不思議なる水中の住族に聞き度きと知りたきとのいと多かるべし、以下號を追て說く所あるべし。

水中に住める動物の中にて、魚類は其機能最も發達し其形も大に最も其種類に富む深さ脛を没するに足らざる谷川より、六千尋の深海に至る迄、水は殆ど是等魚

類を以て充塡すと云て可なり。地球の十分の七は水の領地たるを聞て驚きたるものは『地球は魚族の爲めに造られたり』と聞かば、如何に驚くべきぞ。

プリニーと申す學者は九十四種の魚類を數へ、リニアスは四百七十八種なりと稱へしも、現今に至り一萬三千種の魚類發見せられたり。而して其十分の一は淡水に棲むものなり。

陸上動物が、其本能に依り適當なる地方を擇ぶ如く、魚類も亦深淺冷暖の水を撰で生活するなり。陸上動物は緯度に從ひ、魚類は深淺に依るの差あるのみ。水面を好む者あり、深海を去る能はざるものあり、海底の軟泥に一生を送るものあり。鹹魚は河水に住む能はざれども、淡水鹹水相交る河口の生活をなすものあり、鮭の如きは一年の半は河水に住み半は海水に生活す。吾等は亦水中動物の陸上のものと、其性相同じきを見る、或るものは淋しく孤獨に住み、或ものは簇々群をなして遊び、或るものは終歳同所にあり、或るものは群をなし暖水を追て移る。

魚類の形躰は諸子の熟知する所、今更説明を要せじ。只其形は液躰の中を遊行するに適すと云へば足れり。大洋の深海に住むものも沿岸の淺水に住むものも、河口に住むものも淡水に住むものも、鱗あるも、粒起革を有するも軟骨なるものも硬骨なるものも、其組織に至ては殆ど相異の點無しと雖も、其外貌(色)に至ては其種類千差萬別なり。

鱗にも種々の形あり、六角なるあり、菱形なるあり、大なるもの、小なるもの、赤きもの黒きもの、數ふるに遑あらず。此等の鱗は恰も屋根の瓦の如く背筋より腹部に順序よく葺かれ、粘液を分泌して常に外部を滑かならしめ、又鱗と鱗の隙間には脂肪を充たして海水の浸入を防ぐに備ふ。

魚類中には極めて其色彩の美なるもの多し、美なる蝶

も鳥も其美を競ふ能はざるべし。『ベニザシ』と『パーチ』(鱸の一種)に深紅の錦を着け、青魚と海豚は緑玉の外套をはをり、白銀の板にて胸を戎ふ。鮭の水に跳る時は金光燦然として輝く。

實に魚類は虹霓の七色を以て裝はれ飾られたるものと云て可なり。されど此鮮美なる色彩も多くは歳月を累ぬること、健康を失ふことに依て、色あせ、鈍色に變するもの多し。魚類の健康が其鱗の色彩と如何に關係深きやを知らんと欲せば『ベニザシ』に就て之を試むべし。ベニザシの死せんとするや、其瀕死の苦痛の爲め漸次に深紅の色を失ふなり、其の變化の迅速なること羅馬人は之を以て遊戯の一となせし程なり。

魚族の中、燐光を弄するものあり。靜穏の海上三尋の深さに於て此種の魚を見るを得べし。

ベンチット氏は緑色の燐光を躰の腹部より射出する鰻の事を記せり。此沙魚は晝間燐光を見ずと雖も、夜間は燦然として電燈の如く輝き、其光輝無き箇所は僅に喉の一部のみ。此鱶が斯く燐光を有せるは、其鰭極めて小なる爲め、運動遲鈍にして、他の敏速なる魚類を捕獲する能はざるを以て其燐光を點じて魚類を誘ひ近かしめ、之を獲ふるなりと云ふ。魚類が夜間火光を好むの性あるは、漁夫が篝火を利用して鮭、鱸を漁するを見て知るべし。

魚類の食物は多く海草の液、虫、貝、或は小さき蟹等なれども、亦同類相食むもの多し。吾等は弱肉強食の例を最も魚類に於て見る、彼等は咀嚼せずして、其餌を食ひ、甚だしきに至ては生きたるまゝ呑食することあり『ブルヘッド』は己れの一倍半の大さある沙魚の子を呑み得ると稱す、又ジヤヨンバロウ氏は、ジヤワ近海に於て、狗沙魚の其胃中に、水牛及び犢の頭骨と大龜の肉片とを有せるものを漁獲したることを記し。ブルーニッヒ氏は、マルセーユに魚類の研究中、其胃中

に服着けたる鑑の水夫と、金鎗魚一尾とを呑み居たる狗沙島を見たりと云ふ。猶恐ろしき例多し、旅行記は能く水夫が沙魚の難に罹りしを報ずるにあらずや。

魚類の歯も亦觀察の價値あり。彼等は其齶に歯を有するのみならず、口の上部にも亦歯を有するもの多し、哺乳動物には歯を生ずべき骨三個なれども、魚類は八個を有するなり。其形に至ては圓錐形のものあり、鋸の歯の如きあり、天鵝絨の如きあり、圓きあり、平たきあり、又は鈎の如きあり、北海に住むイキ魚は魚類中恐くは最も恐るべき歯を有するものなるべし、其歯は二種ありて上齶にあるものは三角形にして其尖端狗牙の状をなし、下齶にあるものは臼歯なり。ステラー氏は、東察加近海に於て、イキ魚に遇ひし時鋏鋌を草の如く噛みたるを見しと云ひ。又スコンフエルドはイキ魚の歯に歯痕を印して去りたるとを記せり。吾等は又南海に魚ありて堅牢なる珊瑚を噛むこと牛羊の牧草を食むが如きを聞けり。

『水を呑むと魚の如し』と申す諺あり。魚類程水を呑むものはあらざるべし、去れども是は誠に皮想の考なり、魚は水を呑むに非ず空氣を呼吸するなり。其水分に含有する小量の空氣を取らん爲め水を吸ふなり、而して其空氣と水とを分拆する精巧なる機械は其鰓なり。

魚類は全く音聲を出さずと云ふ説は間違なり。現に音聲出だし得るもの多くあり、『プリッチポマナス』はコイン、コインと鳴き、『レッセ』も亦た同種の音聲を發す、近頃南米エスメラルダ地方のパンゲワピ灣に於て、白色にして背に緑色の班點を有せる小魚の一種を發見せり。此魚は唯に音聲を出だすのみならず、又歌ひ得ると云ふ。此地に滞在したる某氏、一日黄昏波靜かなるに乘じて、艇舟を灣内に浮べたるに、何處ともなく瀏喨たる妙音を耳にせり、彼は頭を擧げて回顧せり、去れど何者をも見ず、是に於て之を船夫に質したるに

そは『シレチ』『ミユシヨ』と稱する二種の魚の發するものなりと答ふ、舟を止め傾耳すれば如何にも妙へに力ありて遠きオルガンを聞くが如くなりと。此魚は日沒より鳴き始め終夜歌ふて止まざると鶯の如しと云ふ。

（未完）

雨露覺帖

一葉庵

（上）田舍のすまゐ

今は唯おぼろげにのみ覺えたれど、茅葺家根新らしく、雜木山の麓、水淸き小川流るゝ邊に建てられたる一軒家これ久慈郡里の宮村の村はづれに、父母祖母共に水戸より引移りて住みし新らしき吾家なりき。木呂とかやいへる幹高く瘦せたる柹の木あり。霜寒き旦、節穴多き雨戸繰ひらきて其梢を見上ぐれば、葉は悉く落ちたるに、柹の實は紅もて彩りたるが如く赤くなりて、高く低く五ッ六ッ殘りたるを、鴉の二羽三羽來りて爭ひつゝ啄む。小さき手もて雨戸を打たゝきて追へば、鴉は先づ靜に頭を傾け此方を見下ろして、暫し動かざりしが、吾がます〳〵焦立て、雨戸をうちならし、足踏みして追ひ立つる樣に、ゆう〳〵と羽づくろひして、一町餘り田をへだてし向ひの松山を越して、一羽消え二羽消え、消え果つる頃しも、吾住家よりは北に、一段高く、雜木山を抽きて聳高く見られたる庄家の家の邊より、法螺の聲朝風に響き渡りて、餘響は奈落に、奈落に次第〳〵に沈むか、九天に九天にいよ〳〵高く飛び去るか、低く細くなりゆくを幼心に訝しく、何ぞと母に問へば、狀使を呼ぶなりと申されぬ。狀使とは何するものぞと折返して尋ぬるに、手紙を持ちて村より村に走せゆく男なり、此男向ひの松山の邊に住めれば、夫れをば來よとて呼ぶなりと、つぶさに說給ひけり。

＊　＊　＊　＊　＊

暇ある折柄とて、父は里の子に、文讀み物書く道を教え導き給ふに、寺子といへしもの七八人はありけり。其寺子の內に新家の丑といへる十二三斗りなるがありき、丑は遊ぶ事にかけては、何事も人に勝り、力も並ならず强かりけれども、學問の道をばフッと嫌ひて、父母に責め立てられ、我父にもしば〳〵說き諭されけれども、性根は更に改まると在らざりしのみか、遂には親々の目を忍びて、金錢を盜出し、叱らるれば二日も三日も鎮守の神の椽下に伏し、又は小松繁れる芝生に眠りなどして家に歸らざりけれど、吾をば如何に思ひなしたりけん、日として訪はぬ日はなかりき。吾父もあらず母も臺所に在る折など、日當りよき障子の影に足投出して、足の欠け損じたる馬に、胴ばかりなる人形、幾度か餘念なく、乘らぬものを乘せんと試みつつある折など『坊ちやま居るか』と子供には似合はぬ太き聲してヌッと障子の蔭より、色黒く鼻平たく、眼のみいとさかしげなる顔差出して、笑ひ顔つくり、懐より必ず駄菓子つかみ出して『又持つて來る』との一言と菓子とを殘して何處にか去るなり。機悪しく吾傍に母などの針仕事などしておはせる時は、黒き顔も平たき鼻も見せず、障子の切れたる穴より、菓子袋のみ押入れて去ることも多かりき。或日吾れ唯一人門邊の小川に沿ふて、蒲公英菫などつみつゝ遊び居たる處に、何處よりか丑は出來りて、共に來よ好きもの買ふてやるべしとて手を取る。父も母も彼をよからぬ者と噂し給へど、吾は幼心に少しも悪しき者とは思はず。連立ちて村はづれなる、里川の流に沿ひて建てられたる家にゆき、ガラ〳〵、薄荷菓子、有平、鐵砲玉、胡麻菓子、肉桂など望むがまゝに買ひて與へられ。又送られて喜び歸りたるに、父と母とは恐し氣なる顔し給ひて、『誰にか、丑にもらひしか、かへして來よ、捨てよ』

などゝ罵り叱り給ひぬ。これ程和解のわからぬ事はなかりき、丑はやさしき者なるに、親切なるものなるに、とのみ思ひ居けるに。丑は其後も五日ばかり毎日來りて、六日目頃よりハタと來ずなれり。『丑は來ないね、如何したの』と母に問ひば、『丑は惡いとして、縛られて柱につながれて居るの』と答ひ給へぬ、かくと聞きて悲しく哀れになりて、如何にかしてゆるしてやらんと思定めつ、吾家よりは雜木山を越して、裏手に當れる彼の家に、其日の暮れんとする頃、吾れは走せつけて『ヤア一人で如何して來さしつた』と驚く彼が父をにらみて『なぜ丑を縛つて置くの、早くゆるしておやり、丑は坊を可愛がるんだから、早くゆるしておやりな、なぜ縛つたの』と言ふを聞きて、彼が父は涙ハラ〳〵と流し『坊ちやま難有ふ御座へます、丑の野郎はナ、縛つて置きましたがナ、昨日から太田へ奉公につん出しました。遠い所へやつちまつたんだからナ、大人しくなつたら又連れて來ますべい、ア、賢けい坊ちやまだ、此村で丑の畜生のことどう尋ねて呉んなすつたな、坊ちやま一人だ、難有ふがんす。サア暗くなるから、送つて上げますべい』と吾を吾家に送り來りて、丑の父は吾父母の前に又泣きつゝ何事をか語りしが、吾は母の膝を枕にして、丑々といふ聲のみ聞きつゝ、何時しか眠りて仕舞ひぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

此村に住みたる折、いと恐ろしかりしもの二つありき、一は狐火、一は助十とかやいへる酒亂の男にして、村には狐のつきたる男と呼びて、女子供は、其聲をきゝ影を見れば、顏色を失ひて逃げ迷ふなりき』。吾家の東北に連れる山あり、其山には折々狐火とて燃ゆ、夫を始めて見たりしは、父と共に庄家の家に赴きて入浴し、吾は父の背に負はれて、今や吾家に入らんとせる折、父は『アレ狐火が燃ゆるぞ、見よ』と言ひ給ふ

に、母も內より戶をひらきつゝ見給ふ。火は炬火にても焚く程にて、明には見ゆれど光無く、少しく青みを帶びて、二三十も連なりて燃立ち、等しくパッと消えては又一ッ燃え二ッ燃ゆと見る間に、パッと一列につらなりて燃ゆ。消えては燃え、燃えては消ゆ、空は薄曇にくもりて、四邊の淋しさいふばかりなく、湯上りの身にも寒氣骨に入りて、夫よりは又狐火が燃ゆるぞと教へられても、出て見る勇氣は更になかりし。

助十は丑が家の前に在りて、家根もあれはて、壁落ち柱ゆがみ、疊といふ疊なく、荒筵二三枚しき、殘りは落間になり居りて、彼が職は桶屋なり。村內に唯一軒の桶屋とて、獨身には餘る程の賃をば得るものを、酒に性根を奪はれて、少しにても賃を得れば酒にかへて醉ひ、醉ふたる時は村內を荒れ廻りて、更に仕事をせず。衣は破れ髮は垢つき、目の色又常ならず。彼は狐のつきたりと人に言はれそめしか、自ら言ひそめしか、果ては醉ふ度に狐の鳴聲をなし、小豆飯食はせよ、油揚食はせよなどいひて狂ひまわる。或時崖高き上に祭られたる稻荷の祠に醉ひて伏し居たるを、村人の見出し追出さんとしけるに、彼は狂ひ出して崖より轉び落ち、手も足も顏も血と泥とにまみれて、ヒヨロ／＼と步出せし樣を、通り合せて見たるわれは、驚き叫びて家に走せ歸り、熱に冒されて二日程やみぬ。其外には天井なき落間の家根裏を、青大將といへる蛇の鼠の子を食はんとて、白き腹を見せつゝうねり行く樣なりき。里の人々はこを少しも恐れず、名をば忘れたるも、折柄遊に來り居たる、十二三の娘の、竿にてつき落し、之を手もて捕ひて、樣々に弄び、高くなげ上げては之をうけとめ、襟などにまつはらせたるを見て驚きの外は無かりき。

* * * * * *

吾家より二町餘り、小川の流に隨ふて行くに、小川の

果ては、小高き山に衝當り右に曲りて、淙々音して谷間に落ちゆく。此小高き山を御富士山と呼びて小き祠あり、老爺婆々の多き所なり。老爺婆々とは此里の方言にて、山蘭の花を言ふなり、田の面の氷解けて芹三葉つむ日となり、庄家の庭に櫻盛となれば、四方の山々霞渡りて、其景色幼心にも何となく心地よく覺へし、寺子二三人を伴ひ、父は酒瓢など用意し給ひて此



御富士山に遊びたるとありき。吾は裸山を彼方此方走せめぐりて、老婆婆々兩手に餘る程摘み取り、父が酒飲み居給ふ傍に坐して、握飯を母が紫蘇の葉をもて包みたるを食ひたる時のうまさ、今だに忘るゝ事能はず。都人はヨモかゝる味をば知るまじ。

詩想

獨歩吟客

二月二十日の團居は例になく集會の人々多かりし由、何よりのことにこそ。かの火吹竹の物語又た殊の外、人々の御意に入りし由、われもうれしく侍り。この度は詩想と題しつ。わが手張より書きぬきたり。もとより果敢なきものゝ數々。君が意にかなひしものゝみ撰みて讀みあげ給はれたし。

丘の白雲

大空に漂ふ白雲の一つあり。童、丘にのぼり松

の小かげに横はりて、ひたすらこれを眺め居たりしが、そのまゝ寐入りぬ。夢は樂しかりき。雲、童をのせて限りなき蒼空を彼方此方に漂ふ意の閑けさ、童はしみ〴〵うれしく思ひぬ。童はいつしか地の上のことを忘れはてたり。めさめし時は秋の日西に傾きて丘の紅葉火の如くかゞやき、松の梢を吹くともなく吹く風の調は遠き島根に寄せては返へす波の音にも似たり。その靜けさ。童は再び夢心地せり。童はいつしか雲のことを忘れはてたり。此後、童も憂き事しげき世の人となりつ。樣々のこと彼を惱ましける。そのをり〳〵憶ひ起して涙催ふすは彼の丘の白雲、かの秋の日の丘なりき。

二人の旅客

雪深き深山の人氣とだえし路を旅客一人ゆきぬ。雪いよ〳〵深く、路益々危く、寒氣堪え難く成りて遂に倒れぬ。その時、又た一人の旅人來りあはし、この樣を見て驚き、たすけ起して藥などあたへしかば、先きの旅客、この恩いづれの時かむくゆべき、身を終はるまで忘れじといひて情深き人の手を執りぬ。後の旅人は微笑みて何事もいはざりき。家に歸らば世の人々にも告げて、君が情深き擧動言ひ廣め、文にも書きとめて後の世の人にも君が名歌はさはやと先きの旅客言ひたしぬ。情深き人は微笑みて何事もいはざりき。斯くて此二人は連れだちて途をいそぎぬ。路は愈々危く雪は益々深し。一人躓きぬ。一人あなやと叫びて其手を執りぬ。二人は底知れぬ谷に墜ち失せたり。千秋萬古、遂に此二人が行衛を知るものなく、まして一人の旅人が情の光をや。

腴土

美はしき菫の種と、やさしき野菊の種と、此の二つの一つを石多く水少なく風勁く土焦たる地にまき、其一つを春風ふき霞たなびき若水流れ鳥啼き蒼空のはて地

に垂る野にまきぬ。一つは枯れて土となり、一つは若葉萠え花咲きて、百年たゝぬ間に野は菫の野となりぬ。この比喩を敎えて國民の心の寛からむことを祈りし聖者在はしける。されど其民の土瘦せて石多く風勁く水少かりしかば、聖者がまきし此言葉も生育に由なく、花も咲かず實も結び得で枯れうせたり。而して其國は荒野と變はりつ。

路傍の梅

少女あり、友が宅にて梅の實をたべしに餘りに美味かりしかば、其たねを持ち歸り、わが家の垣根に埋めおきたり。少女は旅人が立寄る小さき茶屋の娘なりき、年經て其家倒れ、家ありし邊は草深き野と變はりぬ。されど路傍なる梅の老木のみは益々榮えて年々、花咲き、美味き實を結べば、道ゆく旅客はちぎりて喰ひ、其渴きし喉をうるほしけり。されど誰ありて、此梅を此處にまきし少女の此世に有りしや否やを知らず。

家庭

思出草

湖月姥

時世におくれがちなる山里に住みて、もとより文字かくさへおぼつかなき老の身の、人に語るべき言草もあらねど、そゝのかさるゝまゝに、おのれのひくき目にみとめたることども、かいつけつ。

老人を大切にすべし

いづれの家のありさまも、姑をもてる婦人がた老人をもはや世に用なきものゝやうに思はるゝ傾きあると十人に七八人まではあるべし、これは大なる心得違ひなり、およそ老人と申すものは目に見えぬところに役にたつもの、百事家のことを世話やきくれ、若きものゝ少しも氣のつかざる事を老人は先に心づくことおのづから

多ければ、何くれと朝に晩に心づく丈のとは世話やくなり、そを若き心には兎角めんどうがり、むづかしき世話やきといふやうなる心に物事うるさく思ひ、美しき顔もむつかしげな顔に見ゆるやう心の内を外にあらはすゆゑ、老人の方にては世話やけば、若きもの丶氣に入らず世話やかねば氣はつかず、さて〳〵困つたものとつぶやきて、何時か苦情ばなしいづるやうになる、大方は嫁姑の中らいか丶るとより和合せぬものなり、されば若き人々老人の若きもの丶及ばぬところを考へ年寄はなくてならぬ大切のものといふとをよく心得べし、いづれも老人あるうちはうるさくおもふともあれど、亡き人の數に入る後は事毎にさしつかへの出で來るものなり、その時母上世におはせし時今少し大切にいたしたらばなど後悔するともおよびがたし、老人は家の光なり、大切のものと思ひて仕へるやうありたし。

繼子のあつかひ

婦人不幸にして二度三度他家へ嫁ぐとになれば、いきほひま丶子あるところにゆかずとも限り難し、年長くるにつれては兩三人の子供ある家に行やうなることあり、これ等は若き婦人のかけても思はざることなれども、世の中はげにおもふにまかせぬと多ければ、身の不幸にてか丶る場合に立至ると必ずしも無しとはいひ難し、か丶る時によく心得おかでかなはぬはま丶子のあつかひなり、ま丶子の中にも女の子ある時は猶さらにむつかしきものなり、如何やうにしても子供の方にては實の母にてなしといふと心の中にこもり居ればおのづから母に對しおもし　らぬ振舞もありぬべし、さる時に母の方にてもやはりおもしろからぬ取扱すれば一度が二度と重なり終には母子の間は荊棘の如き樣子をあらはすものなり、此時に子供の方は世の艱難を知らぬもの故まづ母の方より愛情をもちてすべての事

を愛の一字にまかせおのれの生みの子と思ふ心にていつくしみ養ひそだてなば終には子の方も母のうつくしき心にひかれ實の母と思ふやうになり行くものなり。下ざまの婦人がかゝる場合にまゝ子をひたふるに憎までも心よからぬ樣子あるより、子の方にては眞の母世にいましなばと自然うらみの情出で來て、用事をいひつけてもよき返事はせぬやうになり、まゝ子いじめと世ににくまるゝもの多く中等以上のきはにてはまたあまりに母の方遠慮して言ふともいはず、教ゆべきとも教へず、仕付おろそかに我まゝにまかせゆけば、その子成長の後男ならば放蕩不身持の人となり、女ならば無教育のあはれむべきものとなること多し。かゝる母となれる人は亡き實母の心になりあつぱれの人にそだてあげむといふやうなる愛情を以ておさなきものを育てゆきなば、誠心やがてその子の上にあつまり、自から眞の母子の如くなりあたゝかき風家にみち、樂しき家庭の行末たのもしきものとならむ。野中兼山といふ儒者の女ゑん女がさる緣者の女子にかきあたへられし文の中に、

先方に子供あるよし、他人の子とて幼きはかはゆし、殊に況んや偕老と思ふ夫の子、誰にあるとても皆いとしき夫の子なれば、なぜに惡むべき理なし、こゝをよく分別して、心をつけいとかわゆがりたまふべし、人々わが腹に生れたる子を、取り立てんとつたなき心あり、前よりある子を大切にさへすれば、わが子は天の守りありて、わが力づけずして仕合せよし、つよく我子をかわゆがりて、まゝ子をにくみたまはゞ、天の責をうくべし、まゝ子を本の母の心になりて見る時はさぞ／＼かわゆく思ひたまふらんと、工夫すべし。

とあり、道理にてはいはでもあきらかなることなれどもことを行はん工夫かんやうのことなりかし。

手紙認ぬ人のあやまち

遠國の知己親戚などより贈りこしたる小包ゆう便などいふものは其時ゞ包ひらかねはなかるべし、されども近しき親せきの往通ひのうちには、雨具等のかりかしなどもおほくあるべし、さる時にはついかへし來る時も我かたよりかせし品のかへりしとなれば、ことさらにつゝみをひらかぬともまゝあるべし、かゝる時に人ゞ注意せではならぬとあり。此頃ある家の妹四里ばかりある山里へかしづきし良人たる人要用のありて、つまの里へきたり泊し、翌日歸途の折から雨の降出ければ、雨具として外套の古きをかり行て、兩三日立て幸便にたのみて風呂しきへつゝみかへしぬ、然るに里の方にては外套のかへり來しとなれば、そのまゝ戸棚に入て日數經て後家內のもの戸棚に入置し羽をり取出し見ればこはいかに鼠にても破りしにや、羽をりの眞中穴あきあり、如何なる事なる哉と戸棚みな取かたづけ見しに先にかへされしつゝみの中より烟の如き氣たちて見へければあやしうおもひて包ひらき見るにふしぎにもその中にありし外套はもとより風呂敷もあなあき、あまつさへ上にのせたる羽をりまでつらぬき



家庭和樂

たり、中には何品も見へざれば何の故ともわかずまことにいぶかしくおもひ、夫より親戚がり右の樣子言ひやり何品か外に入ありしや問あはせたりしに返事には、

先日御借申候外套返上の時、折からめづらしき生椎茸の到來物ありしゆへ、御禮のしるしに中へつゝみ外に御依賴申候書せん紙も入さし上候筈に御座候、

と書しるされたり、それにてやう〳〵穴あきしことの顚末は分明になりたり、まつたく生しい茸のせいぶんつよきものをいつ〳〵までも包おけざる粗忽より生じたることなり。右のしい茸も書せん紙もあとかたなく烟となり、其いきほひ外套羽をりまでもあなあけしなり實におそろくべきとならずや、かゝる粗忽はみな主婦の不行屆より來りたるものなれどかりかたにてもその折なりまたは後にても端書にてもしるし越されたらんには、かようの間違ひあるまじ、世間手紙ゆう便の重寶知りながら筆ぶせふのものはかやうの失策間々あるものなり、つゝしみてわづかの事にも日々に心つくべき事なり。

次につけもの、製法など臺所用につきて一つ二つ、

らつきやう

壹斗に付　鹽七合　らつきやう見えぬ位にわらをまはりへ置きおしをつよくして

よく日數たちつかりたる頃是れを取出し、生酢をもとめ、よくにたてゝさまし、右へらつきやうをきれいにいたしつけ置なり、さすれば壹ヶ年たちてもいたまず、おひ〳〵色よくなりうまくなるなり、壹升につき七勺のわりにてはいたつて鹽あまき故に塩漬にばかりなしをけばかび出あぢはいあしくなる心得べし。

かつをぶしほしようの事

かつをぶしもとめて、ほしかたによくちういせねば黴出づ。殊に梅雨の候には天氣にほしがたく、大にこ

まることあり、是に付ある魚商人にきゝしまゝをみなさまの心得に。まづかつをぶしもとめし時、直にかまどの火の上につるすなり。天氣の有無に關はらず、火の上につるし其後五六日もたちて日にほすべし、毎日晝は日にあて、夜は元の火の上につるすべし、さてかたくなりし頃、いよ〳〵箱へつめる時、一旦箱に入て樣子を見るなり。しかして、取出したいていまたかび生すべし其時又一日日にほし藁たはしにてよくかびをこすり、その後さまして箱につめるなり。もつとも箱へは砂を引おき砂の中にかつをぶしを入る。さすれば一ヶ年二ヶ年大丈夫なり。

梅干の方

梅はいづれの家にてもたくはへ置くと故、殊さらに漬方をしるさずともなれど、いともらくに色つく法を此頃きゝしまゝを左に、梅を壹升に付鹽三合五勺

一　三四日めに日にほしてまた元の鹽に入置、土用に取出しまた干す、尤さきに鹽押後直に紫蘇を鹽にてよくもむ、此鹽にてもむ時よく紫蘇のあくを取べし。わしき色のいづるうちはもみてはすてもみてはすつべし、かくすればよきあかき色いづ、右の紫蘇を鹽漬の梅の中へ入置くべし、さすれば土用頃迄にはしぜんの色、梅へつくなり。扨土用にほして二夜ばかり夜干にする一日干ては夜その酢へ入置ば、しぜん色よくつく也、たいていは日中あつきおもひをして、染てはほし染てはほしすれども、かくの如くすれば日中あつきおもひをせずしてそまるなりおためしあれ。

あま酒の方

糀壹升　米三合　御飯のやはらか位にかたきかゆをこしらへ

かゆあたゝかのうちは糀をよくもみほぐし置かきまぜて、さめるまでめぐりにて、釜の中にてするなり、さめるまでいつまでもするが傳なり、よくさめたる頃入物へうつし置かくの如くに仕込はいつ迄もあぢはいかは

らず、うまき事中々なり。

青柳漬の方

かつを壹本　鹽貳合五勺

加やく　麻の實　生姜　（かつほをさしみの如く切、はらはたをも不殘入血も少々入る、など何れも右よふのもの入るこまかく切此もの味淋へつけ置）

鹽にかつをつきて五六日もたちたる頃かやく入てよし、上等のしにからの如くあぢはいよし酒の肴によし。

小田原いかたゝきの方　（此ゐかゞろまいかにかきるなり）

かしらのところにかたきもの有、夫をとりさりこまかに切、くろわたもとりすつ、其うちに黄色のわたは入て風味よろし、是は目分量にて鹽とまぜ、よくなれたる頃糀入る、一日おいてめぐりにてよくするなり。

水もちかこひやう

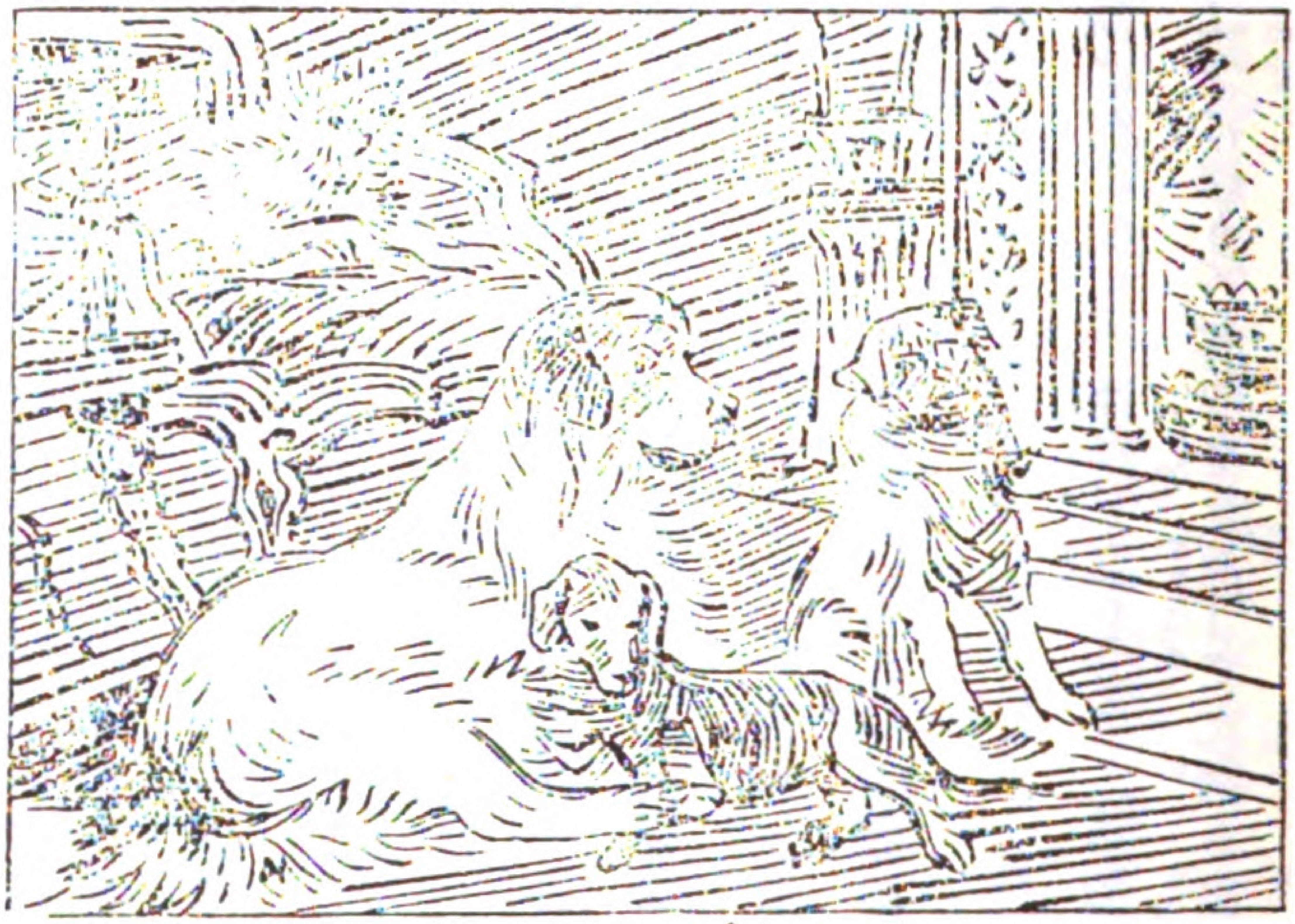
寒糯を搗し日より五日間程日のあたらざる所に、かはかし、六日目に是れを桶につめ、しかして其儘になし置、また五日めにして其翌日に至り、此もちを桶あるひは其外のうつはへ入、是に水を張り置くべし、かくすれば一ヶ年位つけ置ともけつしてあしき臭みを生ずる事なし、尤水面に薄糊の如き物はりわたるといへども、是を除去すれば、其下は清水なり。又此もちをすくひ出すには杓子其外のうつはを用ゆべし。決して人の手を此内へ入るべからず。ふたは小あなあけて夫より出しよく密封すべし。氣のもれぬ方よし。

あとは折にふれて。

花　見　鮓

九十の春光中にありて、魁たる梅の花も、いか散りはてゝ、香をだに留めず、まゆにこもりたる柳も、はやひろがりて、青柳の、いとも長きうら〱たる春の日に、うからやから又は朋達などと連立ちて、摘草に、或は花見に、一日を打ち興じたらんには、いかに樂し

かるべきぞや、されぱとて、かゝる時の辨當に、料理店などにて、物調へんは、費も多く又た興薄きものなれば各々思ひ立ちたる調理をして用意し行き、打ち寄りて食なば其の樂み深かるべし、重詰はなにくれとなく煮たるものを適宜入るればよしとして差措き、茲にはまづ、手輕なる鮓の調理方をいさゝか述ぶべし



家庭和樂

◎握鮓　上等の白米をかしぎ、水を少しく減して炊き、其の飯を大なる平たき板臺に移つし、團扇にてあふぎながら、鹽を僅か程混ぜたる酢を振り掛け飯と酢とをむらのなき樣に丁寧に混ぜて、程能く握りて其上にぐ（實のことなり）を置くべし。飯の上に付ける實は、何品を付くるも好みによるも、通例は鷄卵燒、鮪、鳥貝、烏賊、鯛、鯔、針魚、章魚、おぼろ、あなご、等にて飯と實の間に少し山葵をすりて用ゆべし

鷄卵燒は薄燒にして握りたる飯の上に程能き樣に切り置き貝類はよく洗ひ、水氣は注意して去り、酢味淋に食鹽を少しく落して鉢に入れ漬け置くべし、鯔、針魚、は酢に食鹽を加へて漬け置くべし、而して酢に漬けたるものは雫を暫くきりて用ゆべし

◎海苔卷と卵子卷　飯の下ごしらへは前と同じ、干瓢を味淋と砂糖醤油にて味のよき樣に煮、程よく雫をさるべし、先づ平たき板の上に布巾又は簾（小さき）を置

きて、其の上に淺草海苔を延ばし、酢を混ぜたる飯を薄く平にならべ、手前の方によりて、干瓢の煮たるを四五分計おき片端より押し付ける樣にして、布巾又は簾を中に挾まざる樣調子を取りて卷き、よくつかみて布巾は簾を去り、よき程に輪切にすべし、其の中に椎茸を煮て細く切りて入るゝもよし

卵子卷は卵子を厚く燒きて同樣に卷くものなり

◎五目鮓　は酢を混ぜたる飯に、筍、蓮根、慈姑、干瓢、鹿尾菜、細き昆布、白瀧等を味淋砂糖醤油にて煮、帀を去りて丁寧に混ぜ合せ其の上に淺草海苔を燒き細かにして振り掛け、卵子燒又は紅生姜を細かに切りて用ゆるもよし、

◎稻荷鮓　飯は前の如し、油揚豆腐を煮て（小形なれば倘よし）二つに切り。其の身を庖丁てに搔き出し、蓮根、昆布、筍などを味淋醤油に煮わげて飯と混ぜて油揚の中に入れ、干瓢煮たるにて之を結ぶ。

其の他、箱鮓、切鮓、卯の花鮓、壓鮓、鯖鮓、筍鮓等あれど今は右通例世の人の口に馴れたるものゝみにして餘は他日述ぶる機あるべし

家庭的栽培

さる老人の言に、道樂にても花卉を愛し蔬菜を培養するなどは、きわめて美しき心がけの道樂にして人の心もちを寛かにし長壽養生の一法なり、植木好は長生をするものなりと語りき。こはさる深き仔細のあるにもあらじ、その身體にとりて勞働よろしきを得、精神にとりて養氣になれるがため、自然と健康養生の法にかなふによる。女性は槪して裁縫育兒掃除料理などにたち働くとあるのみにて、今のわが社會のありさまにてはなほその生活住居の室內的なるを免れざれば、蔬菜花卉の培養は、經濟上よりいふも娛樂上よりいふもはた養生法よりいふも、家庭上女性の仕事としてきわめ

て興味あり益あるヿとなるは、今さらあながちに說かでもの事なるべし。田舍住居の庭廣き家にありては勿論ながら、都住居のいとさゝやかに構へたる家にても、多少の空地はあるべし、そこに例へば朝顏の種を蒔きて見よ、期を經ば美しき花はやがて開くべし、終日にもとめ來しを見むよりはおのれが手にてかくは咲かせたりといふ情にても一層の樂ならむ。そこに菜を蒔きて見よ、やがて膳にのぼす香の物となすヿを得べし、天然はたゞわづかなる人の手をかりて、人に種々の樂と利益とを供するものぞかし。土を耕すに鍬を用いず、竹頭木屑にて用を便ずべし、肥料を與ふるには炊水にて事足るべし。かくておのれ培ひたる物の膳に上り、おのれ養ひたる花の觀賞とならむヿ、如何に樂しからむ如何に興あらむ。記者は大かたの家庭の主婦に蔬菜花卉の栽培をすゝむ、今季節に關はるもの數種を擧げて、速に試まれむヿを促すものなり。

◎紫蘇　菜のつまとして必要なり、三四月種まき七月に收穫す。

◎蕃椒　三月下旬より四月に種蒔く、八九月にみのる。

◎洋芹　四月に種まき、四季折々につみて用にたつなり。

◎料理菊　四五月に種を播き十一月頃に花開く花を愛し花を食ふ、一擧兩得。

◎除蟲菊　四月下旬に播種、六月下旬までに花開く。此は順次に開花するものゆゑ、花心半ば開き花粉嚢の破裂したる時を計り、摘みとりて二三日間日光に晒らし、乾し燥きて後、藥研又は乳鉢或は細目の石臼にて粉末とし、絹篩寒冷紗もしくは毛篩に細粗を分ち、罎につめて密閉貯藏すべし、今より心がくれば夏時の用に足るべし。

◎生姜　四月に種苗を植ゆべし、九十日には收りいれ

て膳に上すを得。

◎牽牛花　春彼岸に蒔くべきなれど遲くまきてもあしからず。培養法は種々あれども、蔓をのばさぬやうにするが花輪を大にし美しくするの一方なり。

◎ひな菊　花に單瓣重瓣紅白あり頗る美し四月下旬播き八月頃より漸次開く。

◎鳳仙花　各種あり四月頃種を下し夏月に至り重瓣單瓣の花を開く紅白紫桃色絞り等の各種あり

◎松葉牡丹　花に艶美の光彩あり普く人に愛玩せらる春月種を下し夏秋の間に開く。

◎望江南　春月種を下し芽出で丶後に一本立とすべし、黄色の花を開く、毒虫にさ丶れたる時其葉液を疵口に塗れば痛み忽ち癒ゆ。

◎溪蓀　種子を春月に下し三年の後花を開く、風情ある花の姿なり。

なほ多し折にふれてしるすべし

小兒の世界

新桃太郎（續）

やゑ、

「シヤもの〱しや、己等が如何に邪魔ひろぐとも、此のがら平が頭のコブで一なでなでりや木の葉も同然、路を開いて通しやがれ」

がら平は一人で力味ます、ベチも吠え出す、坊ちやまはしきりに進め〱つて云ひますが、見物は「イヨ御趣向」、「エライゾ親玉」「ウマイ〱」なんて云つて丶、坊ちやまが豆鐵砲をぶつ放しても、ベチが丸太を振り廻しても、丸で暖簾に腕押しで、少しも張り合ひがありません。其の中に

「コワ〱、何におちよるか、往來の邪魔になるコワ〱」

つて巡査がやつて來ました
「御前達は何に者ちや、ウ、何にをちよるのかと云ふのちや、コラ」
坊ちやまは巡査と見ましたので變な風して頭を振つてるがら平を押しのけて、自分で前へ出て、
「僕は大日本帝國の新桃太郎と云ふものですが今度鬼ヶ島へ寶を取りに出て來たのです、貴方は巡査のやうですから、何處に寶があつて、鬼の隊長は何處に居るか詳しく御存んじでしよう敎へて下さいませんか」
「何に寶を取りに來た？、フウン、馬鹿な鬼ヶ島の寶取りなんて事ふ事ア、そりや昔しの話じや、それで態々やつて來たのか」
「勿論なんです、御祖母樣に持つて行つて上げようと思ひまして」
「フウン、兎も角も私が内まで來さつしやい、此んな處では人がたかつていけぬ。來なさい皆んなで揃つて」
坊ちやまも始めから何樣も樣子が違つて鬼はいないし、御城も見えないし、變だ〱と思つてた處でしたから、早速其の後をついて行きますと、巡査は路々、いろ〱の事を話して呉れて、又いろ〱日本の事を聞きますから、坊ちやまは日清戰爭の御話しや、富士八島の御話しや、鐵道馬車に上等が出來たこと、けれども乘手の少ない事、御茶の水で近頃又光線の眼鏡を賣つてる事から、乞食が水道鐵管の中へ寢て居た事など話して、忽ちに御友達になつて終ひました。
そして巡査の内へ行きますと其處には御神さんも居るし姉さんも居るし、それから坊ちやまと御同じ年だと云ふ男の子も居て、其の子から聞きますと、鬼ヶ島も近頃は非常に開けて、日本で丁度丁髷を斬つてしまつた頃、此の方でも皆んな角を切り落して、虎の皮の下

帶も御廢止になり、飛び出た鬼齒や、鬚なんかは悉く片づけてしまつて、學校もあるし病院もあるし、昔し桃太郎時分に居た鬼の隊長は其の店放逐されて今じや共和政治で國會も十年前から開けて、來月は總選擧だと云ふので、坊ちやまは何んだか霧の中を歩ひてゐも居る樣な氣になつて、夫れからは毎日〳〵其の子と一所に鬼ヶ島見物に出掛けて、昔し桃太郎の靑鬼と戰つた所や、雉子と赤鬼と組討をした處なぞ覽て、俊寛の居たと云ふ御寺なぞをも見物しました。

すると其の中に鬼ヶ島の大統領から坊ちやまに御使が立つて是非來て吳れろと云ふ事ですから、がら平、ベチ盛、五助を引き連れて行つて見ますとそれは〳〵立派な御庭で園遊會をして、躍りもあれば唱歌もあるし、坊ちやまも强て勸められたものですから、四百餘州を歌つて、そして又劍舞をしましたら、非常な喝采で、がら平までが大悅びて、ステヽコ躍りをはじめました、御馳走は山のやうにあるし、その又御馳走が不思議の事にはいくら食べても御腹が痛くなる樣な事がなく、五助なんぞはそれはもうテーブルへ噛りついたまゝ、御終ひまで離れませんでした。それのみならず、歸る時にはいろ〳〵御土產を戴いて、特別に御祖母樣のために天人の懷爐つて云ふものを下され、五助も、ペチも、がら平も皆んなそれ〳〵戴きものをして歸つて來ました。それから坊ちやまはまだ暫らく逗留して處々見物したり、方々へ呼ばれたりなぞして、珍らしいものをも餘程集めたものですら、もう歸らふじやないか御祖母樣が御心配なさるといけないからつて、大統領の所へいつてそう云ひますと、それはホントに御名殘り惜い事だが、致し方がない、ブツ軍艦でもつて御送り申しましようつて、坊ちやまがたつて御辭退致しましたけれど、許されずにとう〳〵御留守仁國の洗濯灣から乘り出して、二三日水ばう〳〵の中を通つ

て又品川へ歸つて來ました。
東京では又鬼ヶ島から軍艦が來た、而かも其の中には日本の小供が一人乘つてると云ふ事ですから、町中大騷ぎで、歡迎會やら慰勞會やら、福島中佐が歸つて來た時にも此れ程ではなかつたと云ふ位歡迎されました、その上坊ちやまは御祖母樣と一所に宮中へ召され、いろ〳〵有りがたい御言を頂いて飛んだ面目を施しましたとさ、めでたし〳〵。

小說

椎の蔭

金子笹下庵

（五）

「私の考は無理ではないんでせうかしら」とヴヰオラは力なげに尋ねた「御最もです、然し昨晩のことつてまだあるんでせうな、」

「御座います、丁度晝飯前でした、私はガヰ樣と約束しましたものですから、書齋に逢ひにいつたのです、」

彼女の眼はもう涙で一ぱいになつて「勿論私を待つてゝくれました、此處は種々の影で暗いものですから能く顏も見えない位なんです、私や一時間も待つてゐたよもう晝飯迄、半時間しかないねと言つて、私の手を握つて私やいくら心配したか知れん、けれどもお前は私の妻になつてくれさへすりや可いんだつて、私に接吻しますと突然音がしたんでせう、何かと思へば伯母樣でした、そりやもう怒りましてね、何の眞似だお前達は！ガヰ、私はそんな者と口をきかぬぞ、ヴヰオラお前は自分の室においでつて叱られましてね、私はそのまゝ室にかへりました、それから夕方伯母樣が私の室に來ましてね、えゝもう申

しません、その時です、私を氣違にしましたのは、私や逃げだしてもう死んで了ふつて言ひますと、伯母様はそれが一番だよ、そうすりやガヰにも迷惑はかゝらないから、さうおしなんて言ふんでせう、まあその時の口惜しさツてば私や死んでも忘れられません、それから無中になつて家をかけだしましてね、水にはいらうと思ひましたの、ですが貴君、幸にも池が氷つて居たのでせう、そして到頭貴君に見つけられまして、あんなわけになりましたのですね、」

「死ぬなんて假令どんなことがあらうと全く善くないことです」と自分は言つた、「それは存じて居りますけれども、最うあの時は餘り無理ことを言はれて氣が違つて了つたものですから、でも二度とあんな考は起しません、決して死ぬなんて悪いことは致しますまい、然し私は何處にか行かなければなりませんわ、ガヰ様にも知れないやうな處に、」

「して貴孃もガヰ様がお好きなんでせう、」

「はい、愛して居ります、私はガヰ様の他は死ぬまで誰れも愛しません、けれどもそれがためにあの人を一生苦ませたくはないのです、ね、貴君私をお助け下さるなら、何とか私のかくれ家を見つけて下さいませんか、」

「承知しました、及ぶだけ御盡力致しませう」と自分が答えた時、他の連中も自分らの後にやつて來た、ガヰの顏色は甚く蒼ざめて、恰も自分を嫉いてゐるらしく自分の方に近づいて。

「レヰチル様、貴君は私の友なのか敵なのかわからんですね」と若げな口調で言つた、自分は餘りの可笑さに笑ひだして、

「飛でもない、確にお友達ですサ」と答えた時、ガヰの顏色は稍ゝ平らいだやうである、

「私は母が貴君にヴヰオラの注意を頼んでゐたのを知つてますから、別にヴヰオラと話は致しません、然しヴヰオラは如何うしたからつて私のもの、誰も二人の仲を破れる者はありますまい、私は死ぬ迄愛します、私は總ての行途を排してやるつもりなんです、今迄あれは隨分苦しい目にも逢つたのですから、私は成るべく早く幸福にしてやりたいと思ひますので母なぞは私がヴヰオラを貰ふなら、マノル家は相續させぬ、財産は一文も渡さぬと言つてますが私は何もいらぬと申すんです、御承知の如く私はまだ若くもありますから、少し位の財産は却つてほしくもないんです、私は自分で働きますからな、働きますからな、」

自分は思はず、此大膽にして、血氣なる壯漢の固き決心に動かされた、

「昨夜なぞは隨分大爭動でした、私がヴヰオラと話してましたのを母に見つけられましてな、然し貴君止むを得んのです、誰だつて自分の愛するものと昨夜のような喜ばしい時にね貴君、御察下さいさうぢやないですか、」

「御最もですな、御同感です」と自分は言つた、

「今夜も實は宴會があるんです、多分ヴヰオラも一緒でせうと思ひます、」

自分は此等の會話から、ガヰはまだ夜前椎の下であつた出來事を知らぬといふことを悟つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

何處にも家庭の演劇が友とか知人とかの目の前で演せらるゝほど見にくきものはあらぬ、自分は今その見にくき一の演劇を見物してゐるものなので。

ベルスホルド夫人は自分と余り親しくもならなかつたが自分が會社の一員であるとから、ヂヨン、ルツペンのことに就て相談に來た者とは知られてゐたので、實

は夫人にとりては確に敵の一人である、けれども此夜頗る嬉しがられて、自分に色々と話しかけた。
「貴君も種々世間を御らんになりましたでせうが若い者がたわけた結婚などして、一生つまらなく暮した例も澤山ムりませうね、」
「さようです」と自分は答えて「だが結婚しなかつた爲に一生をつまらなく送つた者も隨分ありましたなあ、」
「何しろ、不思議ですよ、貴君が私共家族のもめて居る時分に來て下さつたなんて、餘程不思議ですね、お聞きにもなりましたらう、拙息の身の上に困つた不始末が起つて居りますんです、ね貴君、レヰチル樣お願ひですが一つ拙息に話してやつて下さいませんか、愛のために結婚するなんて愚なことはありませんからね、拙息はヴヰオラを貰ふつて云つてゐるのです。御らんの如くあれは奇麗ではありますが何一つ有つて居りませんので、」
「あの娘はなかなかめづらしい娘ですな」と自分は遮つてみた、
「左樣なんで、然し財産をもちません、友達もなければ地位もありませんから、必竟は拙息の厄介です、ですから私は全く反對致して居ります、若し私の考にそむひて、あれを嫁るなら、此家は相續させません心得で、そして跡は娘にでも分配てやるばかりなんです、がさうなりまするとデン家の絶滅ですから私も餘り好もしくありません、ならうことなら貴君に願つて拙息に異見して戴いて、ヴヰオラと一緒になるのは自分を一生困らするようなもの、そのため家の平和も破つて了ふといふ理を能くお話し頂きたいのです、」
「それは然し、むづかしい御相談でせうて」と自分が尋ねたら夫人は苦々しき顔付して、

「出來ないことはムいませぬ、私から申しては可笑なものですが、拙息もあれで才子です、ブン家の主人として公の生涯にはいりませばつて決して人の後に立つようなことはないでせうと思ひます、それに致しても多少財產ある地位の家から嫁りませんでは如何も思はしくムいませんので、」

「わかりました、然し若し御子息があの娘を愛し、あの娘も御子息を愛するといふ塲合ならば、結婚を御許しになりますか、」

「否え、それはなりませんです、御承知でもありませう、若い者の愛なんて誠に當てになりませんからね、世間で能くそんな話もありますが、どうも途方もないことなんです、まだ如何うして生活を致すのか知らないのです、それはとても盲目なんでして、もうまるで、もろい情ばかりですからね、貴君、どうかそんなことを仰有らずに拙息にお話し下さいますまいか、」

「ベルスホルド君が適任ぢやありませんか」と自分が言ふと又も苦々しき相が夫人の顔にあらはれた、

「良人では餘り甘過ぎますので、それにヴヰオラを可愛がつて居りますから、充分なことはまうせませんのです、如何うしても私は貴君でなければならないと存じます、是非お願ひ致したいので、」

自分は家族のために決して惡しくはからはぬといふことを繰りかへして、

「それでは財產の他に御異存はないのですな」と尋ねてみた、

「否え、私はもともとあれを好みませんです、ちと高慢ものですから、つい家がもめますので、然し財產さへありませば、それほど拙息を困らせるつもりでもムいません、」

夫人の顔色は變つて來た、蓋しルッベンの借財を思ひ

つひたかして「貴君はルッペンのことでお出になつたのですつて仰有いましたね、」

「はあ、然しベルスホルド様ともお約束しましたので明日にもお話し致す考なんです」

「そのお話つて何か私共の迷惑になることではありますまいか、ルッペンが借財して死んだとまうしてますがほんとでせうかしら」

「いゝや左様なことではないです、確にそんなことではないのです、」

(六)

同じ日の夜である、自分がホールの前を歩むでゐると青ざめた心配げなヴヰオラが眼前に現はれた、

「やあ貴孃も御一緒にお出になりますか」と尋ねたら

「否え私はそれどころぢやありません、私や一人家に殘つて居ります、私やもう悲しくつてなりませぬ、ガヰ様も明日は倫動にお出發になるのです、もうこれぎり逢はれないのと思ひますと、もうもう居ても起つても居られませんわ、私にやどうしてもガヰ様を一生困まらせるやうなことは出來ませんですもの……」と言ひきらぬうち、突然自分等の後から大きな聲で、

「レヰチル様、お待ちまうして居りましたよ」と叫んだのはベルスホルドである、自分は若し此時友に呼ばれなかつたなら、ヴヰオラに眞狀を打ち明けたかも知れぬ、けれども場合として出來なかつたので、彼女の失望せる顔を見ながらも默して別れて了つた。

唯だ二百萬圓　そも彼女の資産なることを知らしめたなら、家族に於ける彼女の地位も頗る變つたであらう、ガヰは素より心からヴヰオラを愛してゐたので、財や地位や彼女にとつて、ほしくはなく、唯だその優しく麗はしき心ばかりがほしかつたので。

* * * * * * *

家に歸つて自分がベルスホルドと客間の前を過ぎようとすると怪しき大きな泣聲がした、

「ヤツ變ですな、何でせう」と叫んで、二人して客間にはいつて見ると、今しも家族の悲劇が初つたとこでベルスホルド夫人はひどく怒つて、恰も裁判官の如く儼然として立つてゐた、

ヴヰオラはガヰの片腕に抱かれて、慄へながら身をガヰに寄せかけてゐた、その麗くしさとしほらしさは實に唯だ形容の外である、

「丁度よかつた、歸つて來て下すつて」と夫人は漸く自分に向つて、やわらかに言つた「此始末ですもの、私も困つて居りました、ガヰ、その手をおとり、見ともないぢやないか、」

「お母樣如何うして、そんな殘酷いことを仰有るんです、ヴヰオラ泣くには及ばんよ、私は如何うしたからつて、お前を見捨てはせんよ、デン家を續げようと續げまいと私は頓着せんからね、」

「否え妾や死んでも貴君を不孝者といはしたくはありません、」とはつきり言ひ放つた、

「お前のために不孝者になるなんて、そんなことがあるものか、ヴヰオラ、」とガヰが答へた時夫人は起ちあがつて「お前方はまだ、そんなことを言つてるのかい、も一度言つて御らん、ゆるしませんぞ、」

「一躰如何うしたんだ、お前達は」とベルスホルトは尋ねた、

「お話しませう、貴郎も御存知でせう、若い者が愛するの、何のつて、愚なとを言つてますのを、私はきびしく言ふんです」と夫人が答えると「お母樣眞面目でそんなことを仰有るんですか」とガヰは遮つた

「眞面目も何もありますか、私が許さないつて言つてるのがわかりませんか、ヴヰオラだつても長い間育て丶教育までしてあるのにそれを忘れて、ガヰを不

孝者にしてかへさうとするんだね、」
「まあ、然し如何うしたのだ、ヴヰオラが泣くなんて己にやわからんな、」
「お話しすればこうなんですよ、今少し前私がヴヰオラに言ひつけて、お前は家におゐでつて言ひましてガヰは外出しましたから、今夜こそは安心と思つてますと一時間も經たぬうち、二人して散歩して居りましたんです、私は如何うしたからつて、私の生きてるうちは二人は一緒にさせないつもりです、」
「否え、お母様、ヴヰオラは私の妻です、妻にします、何と仰有つたからつて、こればかりはお母様、」
「愚なことをお言い、それをさせますか、」
「だがお母様」とガヰが言いかけたが自分はわざとそれを遮つて、「一言私におあづけ下さい、少しお話し致したいことがあるんです、」と言ふと總ての視線は自分の方に集つた、
「ベルスホルド様とは祭日が了んでしまう迄との御約束でしたが、もう今となつては是非お話しせんければならないです、皆様も私がルッペンのことでまゐつたものとは御承知でせう」と言つた時、自分は四人の顔色の同じように變つたのを認めた、殊に夫人は自分に向てあはてながら、
「借財なんですか、」
「否え、飛でもない、ルッペンが負債して死んだなどゝは、以ての外のことです、」
ヴヰオラはガヰの胸に寄せかけてゐた頭をもたげ、自分の方を涙ながらの眼で見あげた、
「それは誤解です、飛でもない誤解です、ルッペンは平生金をためるつて言つてたんです、そして能くためたのです、非常な財産を遺したんですな、」
ベルスホルド夫人の顔色は忽ち變つて、ヴヰオラも起きあがつたまゝ、ガヰに固く寄り添つた、

「私共の會社に印度から、遺言と手紙が屆きましてな
ベルスホルド君に大分娘が世話になつたといふの
で、十萬圓わたしてくれつてあるんです、」
宛然、雷でも頭上に落ちたかの如く、一人として、暫時は口をきゝ得なかつた、
「十萬圓ですつて、あのルツベン、」とベルスホルドが兩手をうつて叫ぶと「まあ驚きましたね、あの人が十萬圓！何故早くお話し下さらながつたのです」と夫人も叫んだ、
「いゝや、まだ話があるんです、御夫人、」と言つて「今迄お話し致さなかつたのは、皆な私の考がありましたので、ルツベンも實は國へもどつて、一緒にあの娘と樂しく暮さうと思つてゐたのでせう、處が不幸にして、死にましたが娘へも二百萬圓の遺産を殘したんです、」
ベルスホルド夫人は見る間なく、優しくなり、今まで酷なりし擧動は媚る如き笑となつて、
「二百萬圓ですつて、えッ大層な遺産ぢやありませんか、ヴ井オラお前も嬉しからうね、」
何等の妙變、轉瞬の變化！人の心ほど不思議なものは



再び椎の蔭にあはれなる乙女を見るとは出來なかつた

ないのである、ヴ井オラは確に嬉しかつたので、ベルスホルド夫人はその后三四日内といふものは、絶えず二百萬圓、二百萬圓と口僻にしてゐた、ヴ井オラは此

後、家族中の最も愛らしく、最も優しき一人と稱えられて、常に夫人の稱贊の種となつたのである、

* * * * * * *

二人は結婚して世にも幸福者となり、ガ井の生涯は一轉した、やがては政海に地位をつくり、聲譽をも博した、けれども自分は終に再び椎の下蔭で失望したあはれな少女の姿を見ることが出來なかつた。

（をはり）

雜録

女子の書簡文

附 俊寛僧都がむすめのふみこ小さんの遺書さの事。

伊那六貝

今の人かく書簡文を見るに、鄭重ならんことを欲して、詞を疊みかさね、句をかざりなどすること極めて多く、「おはしまし」、「さぶらふ」、「御坐候」などいふことばを用ふることいとすくなからず。さては、不便なるはいふまでもなく、却りて敬意をさへ失ひて、失笑を催さしむることなきにあらず、まことに、ふみつくらんとする心に違ふものといふべし。これ豈作者の罪なるのみならんや。

「おはします」といふ詞も「さぶらふ」といふ詞も「御坐候」といふことばも「まゐらす」といふ詞も、それ〴〵適當なる處にこそは書き用ふべけれ、かゝることをいくつも〳〵添へたりとて、それのみにては決して敬禮を増すことにはならぬなり。現今は「さぶらふ」などいふ詞を多く用ひずしては、何かものたらず、且失禮なるやうに思はるれど、そはたゞいさゝかの慣れぬ目先のみのことなり。「おはします」といふ詞なしとて「まゐらす」といふ字見えずとて、なかるべき處

になきは、いさゝかも書簡文の躰を失ふものといふべからず。世のひらけ、學問一日〳〵に開進み行く今日このごろ、いかでか書簡文にも改良を加ふることなくして可ならんや。これ、女子のにのみいふべきにあらず、男子のも、またしかせんことを希ふなり、こゝろみに、『源平盛衰記』に見えたる左の一文を見るべし。

鬼界が島なる父の許におくりしふみ

俊寛僧都の女

その後たよりなきみなしごとなりはてゝ、御ゆくへをうけたまはる便もなし。身のありさまをも知らせまゐらせず、いぶせさ（悒）のみつもれども、世の中かきくらして、霽るゝ心地なくはべり。』さても、三人同じ咎とて、ひとつ島にうつされけるに、二人は免さるゝになどかに（何故）御身ひとり殘り留りたまふらんと、思ひて人知れぬなげき、たゞおぼしめしやらせし（推察）たまへ。』人々島へ流されたまひて後、その緣の者をば尋ねもとめて、手足を損じて責め問ふべしなど聞えはべりしかば、召し使ひしものどもゝ、遠く國々へ落ちうせて、里に一人も留まらざれば、都には、草のゆかりも枯れはてゝ、立ち紛るべきかたもなく、（隱れ家さすべき處もなく）あはれいとほし（懇）と問ふ人もなし。公達も召し捕へらるべしなど聞えしかば、母御前、弟、我が身三人引き倶して、かすかなる便につきて、鞍馬の奥とかやへ迷ひ入り、日影も見えぬ山里に、住みも習はぬ柴の庵にしのび居てさふらひしほどに、朝夕は御事（御前樣の御事）をのみ歎きたまひしに、うち添ふいとけなき身のゆく末（我等きやうだい二人の身のゆくすへ）をいかにせんと、隙なき御物思のつもりにやん病にならせたまひしかば、弟と二人にてとかくいたはりて慰めまゐらせしかども、かなはずして、空しく見なしまゐらせぬ、（死なせ卒りぬ。）生きの別死にてのわかれ、せん方な

ければ、二人歎き暮らし（晝のほどは）泣き明し（夜の間は）はべりしほどに、又、弟も、疱瘡とかや申す病をして、今年の五月に身まかりはべり。同じ道にと（同じ黄泉の道にあとを追ひて行かんと）歎きしかども、はかなき露の命といひながら、消えもやらで（死なばよきに死にもせで）つれなく（わびしく）今までは、草の庵に殘りとゞまりてはべれば、憂き事も、悲しきことも、おぼしめし知るべし。拙き果報のほどこそ、宿世の身のつとめ（前世の身のつとめさ）恥しく思ひはべれ。故母御前、御いたはりのとき、「われ死なば、誰をか便と憑みおはしますべき。奈良の里に姨といふ人（なばなる人が）おはします（によりて）尋ね行きて、うち歎かば、（わが身の上を歎ききこねてたのみなば）さりとも（何はさもあれ）憐みたまはんずらん。」（憐みたまはんさするならん）とおほせられしをうけたまはりおきて、（それゆゑにたよりゆきて）當時は（只今はさいふ意なり。實はそのさきさいふ意なり。）奈良の姨御前のもとにはべり。おろそかなるべきことにはあらねども、（おろそかにもてなさるゝことにはあらねど）かすかなる住居おしはかりたまへ。』さても、この三年まで、いかに御心づよく、有とも、無ともうけたまはらざるらん（何故に有りとも無しとも何ともかともいふ意御音信をたまはらずしておはしましゝとぞ）母御前にも、弟にもおくれて（死におくれて）憑むかたなし。誰にあづけいかにせよとおぼしめすにか（御前さまの御心はいかに）とかくして（いかやうにもして）御上りさふらへ。戀ひしともこひし。ゆかしともゆかし。三年の思ひなげき、（三年つもりたる懐慕思念の情は）水莖に盡しがたくはべれば、（筆にかきつくしがたくはべるによりてこゝに筆を）とゞめ候ひぬ。』おなかしこく』

『源平盛衰記』の作者はこの文の後に附加していへらく、

「僧都はこのふみを見て、卷いつ披いつ泣き悲みていひけるは、俊寛が此の島へ流されし年は、姫（俊寛が女のこと）は十歳に成りしかば今年は十二と覺ゆ。ふみも詞もおとなしく、筆の立てどころも尋常なり、されども、きり繼ぎたるやうに、疾くしてのぼれ、みづから申さんと書

きたるこそ、さすが幼けれ。心にまかせたる道ならば、なじかはしばらくもやすらふべき。はかなき物の書きやうやとて、聲も惜まずをめきたまふ。……」。

あゝ、これまことに十二歳の童女の筆なるべきか。行文の、意到り筆到れる、一きり繼ぎたるやうに、とくしてのぼれみづから申さんと書きたるこそ、さすが幼けれ……」とはことはりたるものから、なほ全文の筆つき必『盛衰記』の作者の作たること疑ふべくもあらず。

この文において、ことに注意すべきは、……點を施したる處なりとす、これを今日の書簡文の「さふらふ」などいふ詞を濫に用ふるにくらぶれば、かくても、おのづからこの文の父に對する敬禮を失はざることを知り得べし。讀者よく〱これを味ひて、實際にこゝろみよ。文法よりするも非難をまぬかれ、實用よりするも、くだ〱しき繁冗を避くることを得べし。

便もなし　心地なくはべり
おぼしめしやらせたまへ　問ねはべりしかば
問ふ人もなし　しのび居てさふらひしほどに
歎きたまひしに　慰めまゐらせしかども
見なしまゐらせぬ　泣きあかしはべりしほどに
身まかりはべり　おぼしめし知るべし
おしはかりたまへ　有さも無さもうけたまはらざるらん
おほしめすには　戀ひしさもこひし
さゞめはべりぬ

今の人の文にては、右の如き場合に、おもふまに〱敬語を書きつけしめば、そもいかならん、過去、現在の時をあやまり、しかのみならず、うるさきことといふばかりなからん。この文の如きは、その作者の何人なるを問はず、とりて以て坐右の摸範とすべし。

この俊寛僧都の女の書簡につきて、余は『娘節用』と稱する一稗史中の一事實を思ひ出づることを禁ずること能はず。(この稗史は既に多く世間に流布すれば、讀

者のうちにはこれを記憶せるもあるべしとおもへば、今その梗概をくだくだしくこゝに述ぶることを要せざるべし。)そのうちに舉げたる一通の手簡のみをこゝに引くべし、これ小さんといふ一校書が死を以てその情人を諫めたるときの遺書にて、一讀せば、おのづからその事實（假作の上の）も推察し得べし。その文は、

小さんの遺書

逢ふは別の初とは、かねてより、人の身の定なきに引きくらべ、覺悟いたし居り候ひしに、やう〳〵只今おもひあたり候まゝ、この世の名殘に一筆書き殘しまゐらせ候。まづとや、御たひらかに御くらし遊ばされ候御事、此の上もなう御よろこび申あげまゐらせ候。』さてしも、吾が身のこと、賤しきしづの伏屋に生れ、草葉の露のはかなき身を、御父君の御情にて、やう〳〵人となり候御恩のほど、海とも山とも、詞には盡しがたく、それのみならず、親、姉、までも命をつなぎ、御惠の淺からぬ御事、いつの世にかむくゐまゐらせんやうもなく、あまつさへ、一日の御恩もおくらず、かへつて御辛勞のみかけまゐらせ候。此の身の罪の深きこと、申上げつくしやうもなく候。えにしは、神の結ばせたまふ御事にや、もとよりいやしきわが身ながらも、君の御情にあづかりまゐらせ候より、（候ひしよりなど改むべし）ひとかたならぬ御氣がねのみあそばし候もみな吾が身故と存じ候へど、身もよもあられず、只々つたなき身をのみうらみまゐらせ候。御祖父さまはじめ、お雪さまにも、さぞ〳〵吾が身を御にくしみ、御恨み遊ばし候はゞ、はて〳〵は、君の御爲あしからんと、行く末のこと存じつゞけ候へば、ながらへ居り候ほど、罪をかさぬるおもひにて、後の世さへもそらおそろしく、又この上に、数々のおん苦勞かけまゐらせんもはかりがた

く、せめては、吾が身を果し候はゞすゑ〳〵、君のおん心もやすかるべしと、とくより、覺悟はきはめまゐらせ候へども、候ひしもさあるべし女心の淺ましく、御名殘のみ惜まれて、今日までながらへ居り候御事、候ひし事さ改むべしまことに〳〵恥かしく存じまゐらせ候。只々此のうへは、お雪さまと御中よう、御祖父樣おんはしめ、御兩親樣へも御孝行のほどねがひ上げまゐらせ候。『二つには、姉ことは、御存じのとほり、まことに、たよりなき身の上、これまでは、及ばずながらも、たがひに便をいたし居り候へども、候ひしもなご改むべし末々は、なほ〳〵、たよりなき身にさふらへば、何とぞ御見捨なく御目をかけ下されれ候やうねんじ上げまゐらせ候。』又、金之助ことは、ぐわんぜなきわんぱくものに候へば、吾が身のなきのちは尋ねわび、泣きむつがり候はんかと、今より目



おれのだ　いやおれのだ

に見え候やうにて、みれんながら、ふびんに存じまゐらせ候、削るべし姉方へと昨日まゐり、よそながらいさまごひのついでに、金之助のことも、よく〳〵賴みおき候へば、あのかたへおんあづけ下され、西東もわかり候やうになり候はゞ、母なし子とて、人に笑はれぬやう、手習などよく〳〵御敎へ下されたく候、かへす〴〵も、君の御身もち、只今までのやうなる御心にては、御爲あしく候まゝ、是より御心を入れかへ、無理なる御酒をおん過しなさらず、宿にのみおんいであそばし、お雪さまにも、無理なるおん事おん申しなされぬやうねがひあげまゐらせ候。』猶この上のおん願には、後の世の御事に御坐候。百とせのおんよはひすごさせたまひて、未來は、ひとつはちすの臺こそ、ひとへに願ひあげまゐらせ候。』まことに、をさなきときより、

おんしたしみ申しあげ、時の間の御わかれだに心憂くぞんじさふらふに、かう永きおんわかれとなり、さかさまなる御回向いたゞき候ことは、いかなるむくい因果にやむべし改と、くりかへし、まことに〳〵おん名殘惜しさいはんかたなく、心もみだれさぶらうて、申しあげたきおん事は、濱の眞砂のつきせねど、わけがた近きかねの音に、死出の山路へ心せき、惜しき筆とめ〳〵。（候又は申し候など改むべし）かしく。』（かしこ改むべし）

この文も、もとより假作のものながら、その情緒を述べたるところ、秩序ありて整然たり。よく〳〵味ひて、文の法を悟るべし。その文法上の誤謬の如きは、傍に△△點を附し、その下に割註をさへ施したれば、これまた深く考察すべし。

嫁入準備と下女

天涯茫々生

那處の家庭に於ても、中等以上の家に下女といふものはあり、家庭雜誌を購讀し玉ふ御方の家には大半下女は居るべし。往來を見れば、お孃樣は流行の着物を召して過ぎ往玉ふ、前のお孃樣と啻に容貌のみならず其の衣服は流行に遲くれたるを、或は田舍縞を身に纒ふて時に袖口を或は襟を或は髮を氣にして、お孃樣に隨いて行くを見ると多し、余は此の樣なる出來事を見る毎に、常に一種の感情胸に浮ぶ世人は如何に思へるやは知らねど、余は下女といふ者に對して常に抑ゆべからざる氣の毒なる思をなす。

一日の生活に如意ならざる中流以下細民の家庭、特に眼につくこと一つあり。最も鮫河橋萬年町新網の如き屋賃は三十五錢乃至七八十錢の家に住み、その職業は人足、車力、人力車夫、下りてかつぽれ、ちよぼくれ、

浪花節、住吉踊、或は下駄の歯入、屑拾、盲乞食の如き貧民の家庭にては其れ程にあらざれども、生活は不如意なるに拘らず、尙ほ世間に對して、即ち同業者若くは近隣に對して外觀も要り、體裁も作らねばならぬ細民の家庭に於いて、甚だ眼につくと一ッあり、娘ある細民の家に見るところにして、それは娘の嫁入仕度に就きてなり。婚姻は人間の最大事なりと謂ふ、男は理屈は兎も角も婚姻を以て其れ程大事とはせざれ共、年頃になりし婦女を見るに如何なる莫連女にても嫁入といふを非常の大事として、且つ其の仕度に事の外苦心するは男子の想像し得ざる所なり、特に地方細民の家庭最も甚し。娘を持てる父母の爐を圍みて相談を凝し、吐息つく其の源は概ね娘の仕末に關係なきは少なし、啻に父母の之を憂ふるのみならず少女當人も亦た意を置き、狹き胸を痛めつゝ



こつちへよこせ

あり、知らず如何にして嫁入仕度するや。あれは地方に於ても都會に於ても、農家と商業家と官吏の家とを問はず下女を見る毎に、思ふは此の嫁入仕度にして、細民家庭の悲慘を思ふと共に、常に下女と嫁入仕度との關係に想ひ及ぶなり。

　下女に出づる悉く嫁入仕度の故とのみいふべからざれども、嫁入仕度に促されて下女に出づるは多し、一家の生計止むべからざる上より、或者は子女を藝娼妓（東京細民の間には此事最も行はる）となすと等しく、娘を下女に出だして生計を補はんとするもなきにあらねど、其の十分の八九までは嫁入仕度に關係あるべし、女學校のお孃樣方は此事を知り玉はぬべけれど。

先づ農家の下女を見るに、他の地方は知らざれども余が故郷なる越中地方にては、農家に使役せらるゝ下女

の得る所、一ヶ年一石より一石二三斗の間なるは通例なり、それに俗に七ッ道具と呼はるゝを貰ふ、前垂一ッ、笠一ッ、下紐一ッ、手拭一筋、腕ヌキ一對、襷一ト掛、木綿一反、七ッ道具と稱せらる、但し一石二三斗を取るは下女の上々にして、機織洗濯をよくするにあらざれば、一石二三斗の下女を見るは稀なるべし。年中氣樂に遊び得る日なし、たゞ紋日の夜は夜業せざるも主婦に叱られざる特例あるのみ、米價の高き此頃の如きは、下女の收入金額にて、十四五圓乃至十七八圓に出づと雖も、米價のやすき五六年前の如き一ヶ年八圓乃至十圓の金にて、一年紋日の夜を除きて三百六十五日、朝五時より夜十時まで竈の下、時には畑に出で、勞働絶へ間なく、二三年の月日を勤めて柳行李一ッ、着物を充たせて漸く嫁入仕度は成るとなり。

是は農家下女の現狀、東京の下女、多くは地方細民の少女より成る。昔日は男の外は他國に出づるとなかりしが、近年地方の少女東京に出づるは日に多く、即ち東京は政治經濟の中心なると共に、地方細民少女の上より見れば嫁入仕度地とやいはまし、四五年より其の町村に見へずなりし何某の娘は、東京に出で良き夫を見立て、立派に暮らし居れりと風の便に噂喧しく、一二年前共に遊びて、互に語らひたる隣家の娘は、昨年出京たるにはや末の妹にと玩弄物を送れる、地方の少女は、試驗に落第せる學生が及第者の風聞を聞けると等しき感情を持ちて、その噂を一々胸中に刻み、もとより地方に在りて、身を作るに充分ならざれば東京の空羨ましく、父母と幾度も相談をつくして、東京に出で、下女とはなるなり。都下數萬の下女、お鍋、おさんどんと呼はれ常に小說家講談師が玩弄の的に當れる下女の、胸中に入りてその下女となりし所以を思へば、多くは婦女子一世の行路難にあるものとはいふべからずや。

今日府下の下女の給料を聞くに、一ヶ年、仲働は十八圓、飯焚は十五圓なりと、三ヶ年にて仲働五十四圓、御飯焚四十五圓、男に判らぬといふなる種々女の身に小遣等も要れど、給料を大事に三年も下女せば少しは嫁入の準備も出來べし。但し、身を全うし、兼て郷國にて考へなるが如く能く思ふ通りにゆくべきや、受宿の女主人に質せば、滿足奉公し上ぐるは僅に三分の一なりと、約束を勤め了らざる多くの少女は、末路には如何になりゆくやらん。

由來都會の地、誘惑多し、雇人受宿にも悪種の者あり、故意に下女を唆かして中途に身を退かせ、自己に都合よき家に換はらせるもありとか。あはれ〱、唯だ貧といふ一ッの缺けるものあるが爲めに、自ら嫁入仕度に胸を苦しめ、誘惑の渦中に入る悲しむべし。



力いつばいひつばろぞ

つれ〲草　大瓠

混烟草

我去春某社の居を新に卜するに當て、此に暫く身を委す、務終つて後、庭園に歩を遣るよ數次なり、隔なき穉童常に訪ひ來つて馴る、其初夏朗晴の日、下午將に三時、稚き親友三人、我が獨り蕭然として庭前にあるを知りて入り來れり、猿蟹の譚「一に橘」も爲盡しさてはあどけなきお尻の押しくらも面白からず、御定まりの御手玉も取り終て、遂に庭に下りて鞠突き初む、東海廻りの半、鞠逸して椽の下に入る、年嵩の娘十ばかりなるが、屈身んで之を捕らんとす、偶々椽下の空地に、何とか云へる大なる葉ある蔓草の芽生して、五寸ばかりなるを認め、予に謂つて曰く「此の葉はあの子、烟草にな

りますよ、私深川に居た時御父さんが煙草に混ぜて御喫みなすつて、大層佳味いつておつしやつたのよ、」とあはれ彼け今、一群に秀で丶裝へども、嘗て世に賴みなき貧てふものを味はいしなり。

燒海苔

美ちやん、御客ざまに饗げるんだから、海苔を急いで燒いておくれ、

美代は火鉢の抽出より、乾海苔の一枚を取り出して火に翳す、兄の腕泊なる友遽しく入り來りて、

オー冷たい、

と美代が今烘れる海苔の下に手を突込む、

母は厨より出で來りて燒たらおくれ、

今燒きますよ、

何を爲てるんだよ、急ぐから賴んだのに、今から燒く位なら人に賴みはしないよ、

美代は默して一寸向を見しばかりにて俯頭く

福助なら

若い男女火鉢を中に、繾綣なく話して、

あのそれじや御前誰が一番可愛い、

そりや貴郎ですさ、貴郎より外には衣裳も要らず食物も要りません、

ぢや御父さんが何と言つてもかい、

御父さんなんぞは何樣でも可い、

ぢや福助ならどうだ、

福助ならですか……

獨乙國慈善事業一斑

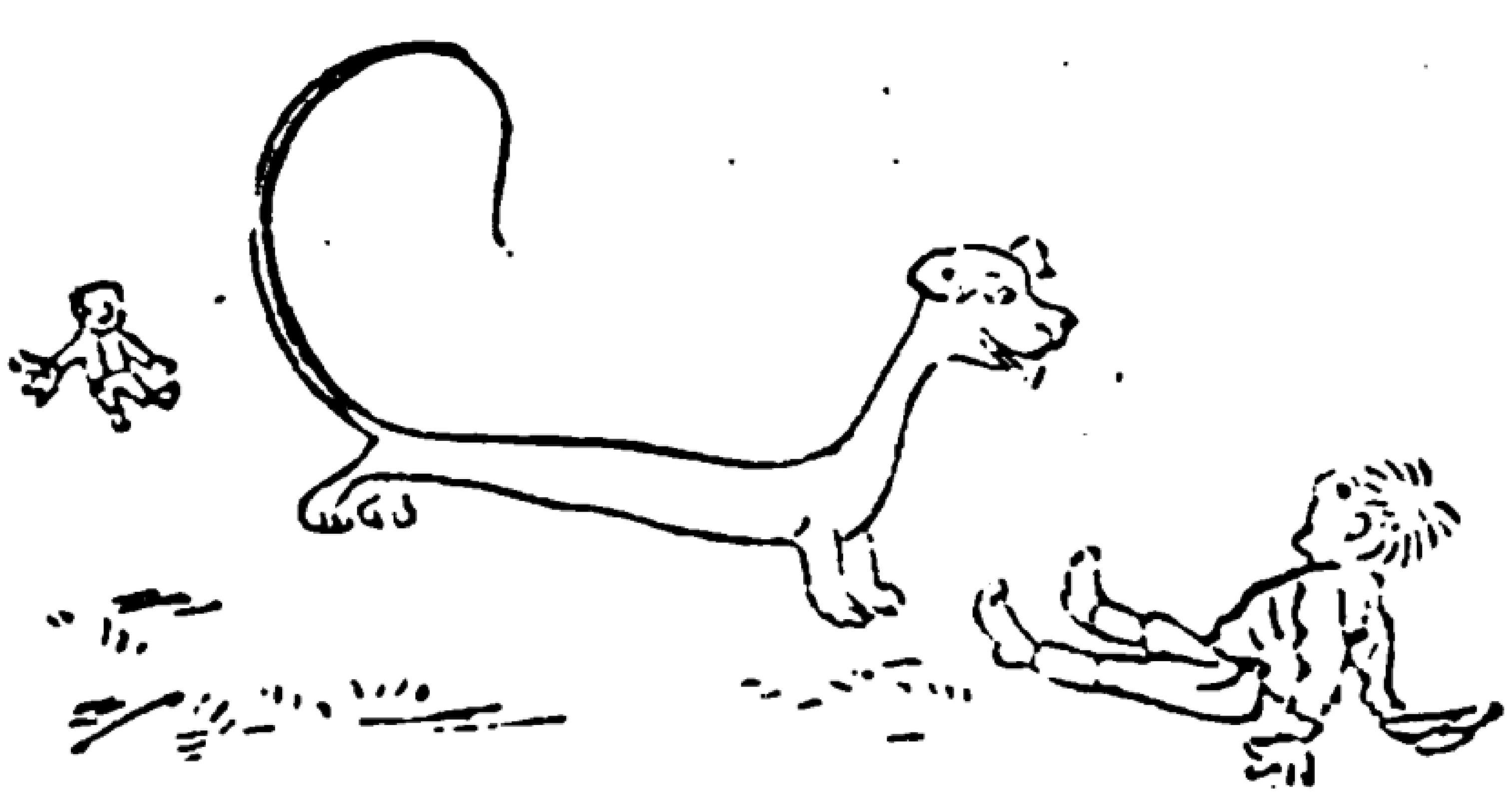
獨乙人　ウエント夫人
なにがし　譯

オーベルリン館

ノワウエスは獨乙國都伯林に近き數多の製造場ある大なる一村にして此村には多くの貧民住し衣食の料にとて終日己が小屋に止まりて織物をなし、或は製造場に

行きて辛き職に付き些細なる賃を得て、其家族を給す、こは男子にのみ限らで、其嬰兒をさへ稍長けたりといふのみなる、または學校にも通ふべき程の幼き兄姉等に委ね、朝は未明より夕は日沒に至るまで終日外に出でゝ勞働に從事せる婦人亦尠からず、又かゝる稚子等は、往々近隣に年老ひ躰力弱はりて日常の働きに堪えがたく、且つ是等稚兒の親達の如くは貧しからぬ懇ろなる人によりて守りをらるゝこともあり、オーベルリン館は是等貧しき不幸なる小兒の爲めに與へられたる大なるめぐみにこそ

此名は信仰篤く、心高く貧しき人々には滿腹の同情を有しシタインの牧師にして此種の慈善事業の計畫者なる、ヨハン、フリイドリヒ、オーベルリン（西曆千七百四十年九月十三日シトラスブルヒに生れ千八百二十六年六月一日同地に歿す）氏の名に因みたるなり、



ヤヽヤいたへんへ

此のノヲウエスなるオーベルリン館は中央にいと廣き庭園を擁して主舍の外に數多の外郭より成立す、主舍の内には館長、牧師館、役員、姉妹方の居室等もあり、此姉妹と呼はるゝは彼等の智識、健康、幷に生涯を捧げて、貧困者、不具者、又は施療病者の慰籍を務めとなさる獨身の婦人をいふなる、又幼稚園保姆科を、學習せんとする女子の寄宿舍あり、是等の女子は一ケ年の修業後、試驗を經たる上皆職にあてらるゝなり、此他に老人病者の爲に設けられたる病室、少年保護所、小學校、幼稚園、稚子の臥床室など皆備はれり、床下には廣き厨房、洗濯室、熨斗檯、などあり、いでこれより少しく外郭に就きて述べ次で主舍にかへりて種々

の慈善の狀況を覗む、
右側に立てるは病院なり階下は婦人、幷に小兒患者の爲め二階は男子のために定めらる、又手術室の備あり、而して階上階下共に淸らかにして廣き浴室を有す、第三階は專ら勞症患者なり、病院より少し隔りて一つの隔離室あり傳染病者の看護せらるゝ所なり、
又主舍の後方に當りて宏壯にして美麗なる一棟は數年前不具小兒の爲めにとて建築せられたるものにて、こは北獨乙に於ける惟一のものにして幾多不具の兒童等が濃き情の手によりて懇ろに迎へらるゝ所なり、是等多數は生來のものと又病氣其他の禍によりて、四肢の完全なる發達を害ひたる不具の徒なり、搆造は先づ二部に區別せられ、其一は女兒他は男兒にて双方に各奇麗なる廣き一室あり、こゝにて彼等は其身躰の健康、敎育等衣食の細事に至るまで一切洩れなく守れる姉妹の許に種々の事を敎へらる、此につゞき小さき鐵の床架の列り立てる寢室、躰操場、子供の健康の爲めに設けられたる醫師より管理せらるゝ越歷室、浴室、及敎場、などあり。又姉妹の居室もありて、厨房も附屬す、最も憫然なる不具者を見るは此處なり、先年妾のこゝに訪ひたりし折十四五ともおぼしき一少女の生れながらにして兩腕を缺きたりといふが一切足を用ゐて美しの針仕事につけるを見ぬ、又脊髓の軟弱にして曲かり、或は手足の跛へたる者の一片の食も他の助けをからでは口に進むること叶はざるあり、又は盲目にして耳口共に利かざる一少女の猶よく單獨にて衣服を着け巧に、細かなる針仕事なすもありき、又六七才に滿たざる者、其れより幼きもの聾、啞など除きては凡て皆子供は每朝學校に出て敎師又は初等學科の修養ある姉妹より其々敎へらるゝなり、上にいふ不具の小兒等は各學ぶところを異にす、一人の姉妹にして讀書、算術、作文、習字、幷に實物敎授を受持てり、午食は十二時に

して食後は男女共に其々の手仕事の課業あり、毯、仕折、ランプの下敷等より初めて稍六ヶ敷ものに及ぶなり、四肢の自由だに叶はず世の中に一として意に適ふことなき最も不幸なる者さへなほ、是等の業を營めり、一人は針の備へられたる小さき木軸を口に保ちうつくしき下繪たる、紙片の上に畫かれたる圖畫の外線を逐ひて刺し又他に指の叶ふ者ありて之を助けつゝ縫箔するあり、是等憫むべき不具の者の其業に對ひて、そが完全を望むべきにあらずと雖も心をくだき力を盡して彼等をして少しなりとも幸福を多く得させんとする能き事には既に達しぬといふを得む、妾未だ此狀況を目の當り見ざりし前には彼等の此處にかくも樂しき生活を見出さんとは、夢にだにも想像すること能はざりき、たとひ彼等は、その躰に不完全を脫することは叶はずとはいへ、この館に到てよりは全く身の不自由を覺えず、各ゝいと幸福にある様、明かに顯はれたり、まことや神は彼等に慰籍を與へ給ふ、貧しき父母の家に在りては、特に彼等の不幸なる者の爲に甚だ緊要なる身躰并に精神上の看護教育、いかで望まるべき、唯ゝ家族にとりては、一の重荷たるのみ、此處に迎へらるゝことなかりせば堪えがたき痛苦は、何時、如何にして取り去らるべきか、生涯、不憫のものとして痛苦は、家族と自身の上に置かれて呻吟の中に其生を終るべきのみ、

參觀日の定めあれば近地の人ゝは皆良き心より好むでこゝに訪ひ來るなり、

又午後には日課の復習をなし男兒の躰操もあり夕べの食事を了れば甚しく疲れたるものは浴せしめ一定の時刻に於て淸らかなる臥床の中にて共に祈り共に歌ひて眠りに就くなり、確信式（新教上の儀式十五六才に於てこの式を受く）終りたる男兒は主舍に近かく住へる敎師及び其の妻たる人の看督の許に不具の手足にも日

常用品を作ることを學び後日商店の徒弟となるもあり。

今再び主舍の方にかへらんに稚兒の臥床室と稱せらるゝ所こそ一際目立ちて覺ゆれ、此はたゞ實に要用なる設けにしてノワウエスに與へられたる慈惠の一源泉といふ可し、此場所は二つの廣き室と他に今一つの小さきすべて三室あり、大なる室には、稚子の床及小さき車幾個となく備はり三四才以下の稚子等は朝まだき其父母に伴はれて此處に來る其各々の腕には朝飯と午後の間食に充つる麵麭入れたる小さき籠かゝれり、遊戯室たる小さき室に集る、こゝより戸を開けば一つの廣き露臺に出づることを得、待つ間もなく、浴室の準備なり、先づ是等の稚子を意を用ゐて入浴せしめ、衣服はこゝなるオーベルリンク館所有の淸らかなるものと着更へしめ、小さき車の中に導くなり、且つ長けたる者を浴みせしむる間に一方にては堪えかねて泣き叫び、或は乳を與へらるゝなどもありて、其姉妹がたのいそがしさいかばかりぞや、やうやくにして、浴み果つれば、皆一人一人、臥床にて一たび慰かされたるあしたの夢をつひて結ぶなり。九時ごろとなれば再び目醒めしか、奇麗に衣を整ひ、遊戯室に伴ひ、愛らしき椅子の上に載せられ。皆小さき手を合せ兼て敎へられたる祈りの言葉を姉妹と共に片こと交りに祈りたる後各々の籠より麵麭を取り出し、又最も新鮮なる、館より配られたる牛乳、珈琲などを飮ましむ、彼等は手顔を淸められたる後は、室内又は露臺の上に出でゝ思が儘に遊び興ずるなり、其樣は一々こゝに盡しがたけれども、あるは玩具もて小さきものゝ頭をうち、あるは遊び仲間の手にせるを奪ひなどして泣き叫ぶ聲の起るは、まことに然るべき事にして姉妹方の彼方此方に涙を拭ひ、あるは、いさめ慰めもてゆくぞ忙はしきかくの如き難事は一人の力の及ぶべくもあらず、特に稚

子は他に種々の格別なる保護と注意とを要する事にしあれば、常に他に二人の若き補助者を以て之を助く、十二時となれば一同食卓に座して、滋養を主とする質素なる食を充分にいと心地よげに食し又汚れたる顔と手とを清めらるゝなり、食後はまた臥床に入りて一時間乃至二時間計りは睡眠することとなれども小さき胃嚢の滿ちたる時は、好むで遊ばんとするが故に、深き注意を要するなり。稚兒の裂ける褥布を見て知らる、三時より四時までは再び又牛乳、珈琲を與へられ、其れより漸く姉妹三人には稚兒の着たる衣を去りもと着て來しものと更めしむ、尋で其の父母兄姉より伴はれて己の家に歸り行くなり、親は毎週僅かばかりを食料弁に保育のためにとて拂へり然れども其費用の十分一にも當らぬなり、唯々彼等をして其の勞に酬ゆる所有らしめんとする心を失はざらしめんためなり、

小兒の三四才の頃に達すれば最早此處に伴はれずして幼稚園に於て遊戯、實物教授、聖書の物語、聖歌、唱歌などを學び安息日の外は日々此の處に來る、六才に滿つれば公立の小學校に入る事なむど此の時にも猶この館は彼等を見捨てず、父母の請ふあらば、之を小兒監督所といふへ入るなり、こゝにては姉妹がたの許にて日課の復習をなし、またその少しく長じたるものは、姉妹の指圖の下に、己等又は先きに言し處の臥床の稚兒の爲に厨房に於て手助けをなせり。

かくのごとくにしてオーベルリング館は基督教の慈善を實施し其他に緊要なりと見とめしものは決して之を度外に視るといふとなし、姉妹の或者は朝なく早く門を出で、村の貧しき家を見舞ひ、病に臥せる母あれば代はりて室內を清め、小兒に浴みせしめ食物を調べ、能ふ限り力を添へ慰籍を與ふるなり、妾の本國たる獨乙に在りては、此種の慈善的設けいと多かる中にも蓋しこの館のごときは最も完備せる者なるべし。

家庭の實業

中野其村

(一) 卷煙草

終日營々外にかせぎ、日暮星を戴いて歸る處、一陶の酒を用意して家妻の待つあり、實にや朝未明より片時休まず、働きにはたらき苦しさも、又は身に餘まるそれの勞れも、蓋し其莞爾なるゑまひに慰み、其眞心のもてなしには、如何で醫やされざることのあるべきや。

誰かいふ社會下層のところ、所謂勞働者の群れの中、又は貧民といふものには、快樂幸福の伴はざると、誠とに世の中のことを知らざる、うつけ人どもが皮相の言たり、私かに思ふ人世眞正の快樂も、地上最大の幸福も、却つてこれ然かく事足らざる、然かく物に不自由勝なる、是等このけじめ低きあたりにありと、請ふ試みに思ひ見るべし、一屋の下、茲に棲を共にせるもの、實にその肉親のもの許りにて、一つは其夫婦兩姓の愛をさまたげ、一つは又、親子同情の中らひを兎もすれば妨げ害なふ、嬖妾婢膝なんどいふもの、いやか上に多ほく交れる、世の中以上の層には似ず、日々の働らきに肉躰おのづから健かなれば、健康も常に保たること、他の處にては見べくもあらず、世に聲高く嘆こつめる物價騰貴、世間不景氣のことにつれては、いふまでもなく困難緻い到らざるにあらざれども、斯からん時には常にも増し、夫婦共かせぎに其身を惜まず、まだ頑是なき幼き者まで、相當の手助けをなして、汗に衣食す、たとひ其身に經へる處、よしやつゝれなすわゝけにもあれさて又日々に食ふ處、口に合かぬる糟糠にもあれ、かくまでに其天職を盡して後ちに、得たる處のもの等なれば、所謂飽食暖衣の人が、飾り立てたる裘に錦に、又は身を肥やせる肉に酒に、其形のみこそは僅かに劣れ、實においては優るや數等、

たふとしとも又たふとしといふべきなり。

さてこの下層のところにありて、誠とに家夫の片腕となり、人世五十年の永き年月、共苦しみを半ば別ちて、日々を送り年を迎ふる、家妻の勞、かの內職といふなるもの、日々にしては小なるが如く思ひたれども、積り〳〵ては誠とに小さきことにはあらず、頗る莫大の量、たとへば塵ひぢの積りつもりて山となるごと、その收入の賃錢たるもの、實に下層社會全躰の、經濟殆んど半ばを保てる、社會的に見るも中々に小なることにあらず、況んや、是れがためにそれよりそれと、留守まもる家妻の身を正だすこと、たとへば外出外あるき、俚言にいはゆる金棒曳きの忌むべき所業かてゝはこれより起るべきこと、一々を正し行くなんといふこと、言盡くすべくもなく多くあるとや、されば、斯る處のすべてに通じては、其所謂道德上より見ていふも、亦又輕るきことにはあらず。

第一、賃錢を得て經濟を助け、第二、おのづから外あるきを禁じて身を愼ましめ、第三、我れ知らず貯蓄の美風を養ひなす、其他猶々利益多ほき、この內職といふものは、蓋し社會安寧の一要素として、なくて叶はざることなり。

茲兩三年の處に渡りて、樣々の統計表などを照らし見るに、この內職の人の數、年々にます〳〵多く增し行きて、今はすでに三倍以上の數とはなれる、爭ふべからざる事實なりけり、これ併しながら、樣々と工業の進步に伴なふことにして、唯々然るべき樣なれども、一つは公衆勞働を重んずる美風のいよ〳〵勝り行ける印なるべくあながちに彼の需要供求の結果、道理上云々などゝ夢輕々に見るべきならず、さるにても斯る美風の日々に增し行くあるは實に喜ばしきことなり。

然してこの、內職なるもの、火鉢の前の賃仕事にて、其日其夜を送れるもの、唯それ市內のみにても、殆ん

○○○○と六十萬人近くなりと、聞くところ、唯それ下層の人のみならず、小官吏、小屬吏、會社員、鐵道員などはいふも更ら、其他割合に身柄よき處にある人ゝにても其妻のこのことをなすもの、あへて少なきにあらざるなり、斯る美風、其家庭、其留守宅に於て行はれつゝある、寧ろほこるべき事なるぞ、あさましき世の人ゝの、表のみを飾る心、友人にかくし、隣りにおほへる、笑ふべくも又忌むべきことなり。

この內職を今其種類によりて區別すれば、殆んど三十五六種あり、蓋し猶ほ見殘せる隱さへあらんか、されば總がては四十種に近かるべき、其の多き中に就いて、其事の尤も大ひにして、範圍頗る廣く、從つてこれにより身を立てるもの尤も多きは、彼の卷煙草の內職を以て、抑も其第一等となすべきなり。

內職の何れも、左程六つヶ敷きものはあらず、されども亦其中には、稍ゝ熟練を要するものあり、たとへば先き年頃に行はれ、一時この內職界の覇を握りし、彼の石盤繪の彩色などは、實にこの熟練を要すべきものゝ一にて、樣ゝなる繪の具の配合、及び運筆の手だれなる、唯ゝ器用のみにては、なか〳〵に、出來難きなり、それ等のものに相反して、この卷煙草まきなどは、先ゝ仕易きことの一なり、然して唯仕易きのみにあらず、頗る簡單なるものゝ一なり、其すべての上に渡りて、これがために要する處は、眞鍮製の管、これは煙草の指込みに用ふるもの、五分六分、乃至一寸など、いふて、其太さの種類だけの數、頗る少量の價にて手にすべし、然して一個或は二個の張箱、これは密柑箱の古きにてもよし、即ちこれ等のみなれば充分にして事に欠くなし、然して其仕事、一家の內にて親子夫婦、各ゝ手別けしてなすを得べし、其煙草を指込むことは、漸ゝ經驗のあるもの、大抵は其家の妻、或は姉娘などがなすべく、老人は卷上げたるものを一ゝ數へ

立てゝ、五十本百本とこれを束にし、幼きものは又、口紙を下巻きして少しく助すけ、猶手に手に其ひまを見て、外部の皮、薄き洋紙を圓くまくなり、斯くの如く一人々殆んど手明けるものなく、都合よく其時を利用して行く時は、一家三四人の手にて、たしかに三十四錢の賃は一年三百六十五日、働けば實に空日もなしに收め得べし。

近頃街巷の噂たかき、天狗煙草の仰ゝしき看板については、定めし聞きたまひたることあるべし、誠とにそれ到る處の人ゝが、茶呑話しに笑ひの種として、その仰ゝしさをいふめれども、何んぞ知らん、都門各區をはじめ、近くは新宿、品川、根岸、千住など、町はづれの各宿場より、遠くは宇都宮近在まで、廣く其手を八方に擴げ、貧しき人の留守などを、すべてこの煙草業のために使ひ、各々にその日々々、相當の賃を仕送りて經濟を助けつゝある、中ゝに小さきことにはあらず、其何れの工場にも、擔場に太く記されたる、職工何十何人など、元より其工場にあるもののみにはあらずして、即ちこれ等、すべてをいれるなり、されば、其如何に仰ゝしかるべきも、如何にことゝゝしかるべきも、もしも此等の側より見れば、いたく謝すべきことにはあらずや。

さて此等の多くの人が、この内職によつて得る處は、唯それ賃錢のみにあらず、巻あまりの粉などの、はき集めたるもの、日ゝの吸料となりて、一家の何れも日用の煙草に、身錢一厘をしも費やさゞる、數へ立つれば頗る多き、所謂餘徳といふものなり。

蝶一ツまひのたもとをやすめけり、　　第三子
　わが持つ花の花びらの上に。

あまつ風いさのしらべをテレグラフ、　　麗水生
　さまろつばめを琴ぢにはして。

訪問

大久保公家庭の片影及其書簡

維新の三傑西郷、大久保、木戸と並稱せられ、兒童走卒に至るまでもその名を知る、その政治上に社會上に三傑の與へたる事業、感化は素より偉大にして幾多の書に編せられ幾等の傳記に錄され、歷史上に光明を放ちて長く後昆の立志談として遺すを得るなり。去かれどもかゝる英雄の家庭的生活の有様に至りては未だ之を記せるもの鮮く、たゞ定めてその行爲事業とひとしく尋常に異なるものあるべしと推想さるのみにて、われ人共に此俊傑の家庭は如何なるかを知悉せむことを欲するや切なり。記者は爾今かゝる方面の家庭の狀態を讀者に報ずるの緖として、甲東大久保公の書簡及その家庭的生活の片影を記すべし。

談は公の三子、大久保利武氏に就て聞く所に據る、書簡は即ち利武氏の所持せらるゝを抄寫せるものなり。」

◎土曜日の會食　公が明治四年歐米に航して歸朝するや西洋文物の整美に感じ、社會上の組織に就てはもとより、深く家庭上の美風に省みる所ありて、やがて今の霞ヶ關の邸宅を新築されしなり、今日より見れば建築とて粗末なるものなれど、當時に在りては頗る人目を惹きたるものなりきといふ。かくて家屋の構造上に意を用いられしと共に、家庭生活の上に意を注がれ、歸朝以後は土曜日の夜を以て家族を會して團欒卓を圍み會食するを例とされき、時に長子利和(嗣子侯爵)次子伸顯及利武の三氏は學校に在りて修業寄宿され此土曜日の夜に歸邸するを無上の樂とし、公自身も此際は平生公務多端の勞を慰する唯一の和樂とせられしといふ。公が政治上社會上に於ける行爲事業は眞に一點の私なく邦家の爲に盡悴し其薨せし後家に餘財無かりし

清廉高潔の生涯は、その心を外に注ぐこと多くして内に省みること少かりしにも拘はらず、このまことに美しき家族團欒の家庭的生活の和樂ありしを想察せば、俊傑といひ英雄といふ人の行爲事業が家庭の和樂と如何に切なる關係あるかを悟ることを得べし。英雄はなほ小兒の如しといふことあり、まことに俊れたる人はまた必ずかゝる和樂の方面をその生涯の上に有せるを視るべし。

◎子供に對する敎育法　　公が子供を敎育する方法は其要をとりて細事の些々たることには決して干渉せず、總べて獨立の氣風を助長せしむる方針をとられたり、利和侯に於けるも伸顯子に於けるも利武氏に於けるも學校に入るゝ皆之を別にして成るべく互に相依賴するの傾向を避け、獨立獨歩といふやうなる氣象を養はせしなり。その諸子が今日各父公の遺靈を得て箕裘を嗣がれ將來三傑の一たる人の家聲を發揚すべき資ある所以は、實に公の敎育法その尋常ならぬに因れりといふべし。利和侯は十二歳にて公に隨つて歐米に游學し、牧野子はその折は九歳か十歳なりしが、おのれも行きたしと切に泣きて請はれければ伴はれしなりといふ。かくて兩氏海外にありてもまた別箇に敎師に預けられたり。かゝる敎育法なれば、子供を叱るといふやうなることは少しもなく、若し過失あれば靜に訓誨を加へられ、言葉をもて敎ゆるよりも寧ろ實行をもて悟入省察せしめて感化されしなり。本誌の社説にある子弟をして獨立の氣象を養はしむることの如き、大久保公は蓋しよく此風をその子に與へられしものといふべし。

◎その書簡　　公は常に公務多端なるため、家族間に於ける書信の往復割合に少く、玆に錄するものゝ如きは、まことに得難きものゝ一なり。こは明治八年に故鄕におはせし夫人に宛て記されしものにて、子供に對し家族に對し公が如何なる考をもち居られしか、公の

敎育の意見は如何なりしかを知るに足るべきものにて、俊傑の家庭に於ける生活の片影を窺ふべきものなり。讀者公が社會上政治上に於ける行爲事業の大なるを視て、さらにこの書信によりて公が家庭上濃かなる情味の湧くが如く優さしき所あるを玩味熟讀し、もて子弟敎育と共に家庭の上に深く省るの資料とすべし。」

公が家庭的生活の逸事談はなほつきず、記者は次號に於てさらに掲ぐる所あるべし。

公の書簡は即ち左の如し

任幸便一筆申入候秋冷相催候處彌以一同無異の筈めてたくそんじ候次に於彦元拙者始皆〻無別條候間御安意可被給候(中略)

一彦伸外國人の師匠相頼別而致修業大に長進いたし候伸熊も此頃書物も埒明き大に仕合の至に候おみわさまへ其段御傳可被成候當今はむかしの世中とは夜と晝との違ひにて今迄の樣に鹿兒島にて生立あまみ事のみにては行先き人并に家を起し候事も不相調百姓か物貰りになり候外無之是よりは外國の學問相調よほど人に増り不申候ては老而子にたよるとも不出來氣の毒をいたし候より外無之候されば子供の內手習學問諸藝不致出精候而は不相濟候につき混而外國人へ相たのみ修業爲致候兩人とも別而仕立チよろしく外國人もほめ申候由彦之進は年も長し故猶更進みよろしく皆〻ほめ者にて大にうれしく候女の考にては子供を旅をさせ外國人などにたのみ不自由あるまいかどうぞあろうなどゝ案じ候も無理ならず候へども今日の世中に相成候て其位の事にては前條の通老の果には氣の毒のみいたし候より外無之能々あきらめ可被申候三熊も少しは成長の筈に付學校にいれ候樣可被致子供をあまへかし生立ち候ては子供をかはいがつて子供に一生の恥をあたへ候同樣に候無申迄候得共山田氏直彌もすま殿より精々致戒可被致

候おゑいも女の事に候得共手習書物よみ何方なりと
もたのみ修業爲致候樣みねどのへ可被申候かやうに
申事が今十年も立候て直に思ひ當り可被申候右之趣
兼而申入候（中略）
一類中何方へもよろしく別而おば樣方きちどの方へ
よろしく可被給候
今日吉井氏西鄕信吾殿被致出立候に付一筆如此に
候何も直左右承知可被給候かしく

八月二十四日　一藏

彦之進
仲熊
達熊
駿熊
七熊

宿元
三熊殿
雄熊殿
參人々

尙々其地も別而豐作の由當年は何方も同樣にて誠に
恐悅の至に候

（記者曰く文中彦之進は利和侯爵、仲熊は牧野伸顯子（全權公使）三熊は即ち利武氏なり、達熊以下の諸氏はなほ或は北海道に或は歐米に現今修學中なりと知るべし。吉井氏は故吉井友實氏、信吾殿は即ち西鄕從道侯なり。文中女性の名は親姻の人々なり。）

郷思　石川柳子（寄）

むらからす塒にかへる夕ぐれに、
のぞむも戀しふるさとのそら。

社會

岡山孤兒院

石井十次氏が誠實熱心の宗敎的信仰より創立既に十年餘の星霜を經て、漸々盛になりゆく岡山の孤兒院につき、設立の由來、組織の大要を錄すべし。婦人社會が世のために盡すべきこと元より多けれど、かゝる事業に對して同情を表するは、蓋しまた至大の美性を發揮するに足るものならむか。

孤兒院は本部を岡山市門田屋敷に、支部を日向國兒湯郡茶臼原に置き、天下無告の孤兒を救ひその父母に代りて養育するの所なり。六歲以上十二歲以下にして何國の者たるを問はず入院を許し、十六歲乃至二十歲にして退院せしむ。孤兒院に尋常高等小學校あり、卒業の後は院內の各實業部或は他の農工商家に奉公せしめ一の職業を學ばしむ。

維持法は內外國有志者の寄附金品と實業部の收入とを以て之を維持す。

而して石井氏が此孤兒院を設立する由來は眞に左の動機に基きたるものなり。

明治十九年の末有名なる英國のブリストル孤兒院の創立者ジョージ、ミューラ氏は世界漫遊の途次我邦に渡來し各所に於てその信仰の生涯と孤兒院事業のとを演說せるが、石井氏は書信に新聞に之を觀て大に心を動かしたるが、明治二十年四月一日痿痾のため岡山を距る五里邑久郡上阿知といへる村落に轉じ、傍ら醫術實研のため或る醫師の診察所を受持ちたるに、診察所の隣に大師堂あり、巡禮或は乞食等の宿泊所なりき。石井氏は每朝起きて大師堂を訪ひ彼の憐れむべき巡禮等を慰藉するをもて一の樂となせるが、同月二十日の朝、二人の兄妹大師堂に在り、年を問へば兄は八歲妹は五

歳なりと、氏は二人に飯を與へ歸りしに、程たちて襤褸をまとへる四十前後の婦人氏の寓を訪うて兄妹の母なるとを告げて具さに恩を謝す、石井氏その憐れむべき有様を見て事情を問ふに彼女はもと備後國葦田郡藤尾村のものにて前原ツ子といひ、家貧にして子供多く、終に負債のために故郷に居り難く、前年四國巡禮と稱して夫婦子供五人連れにて四國に渡り所々流浪せしが、夫と姉娘とは不幸にも熱病の爲に小豆島にて死去し、三人詮方なく乞食をしながら故郷を指して歸らんとする途次なり。もし彼女獨りなるかまた子供一人のみならば他人の内に雇はれ洗濯なとしても口を糊するとを得べけれど、子供の二人もありといふにて誰も嫌て雇ふものなく、去りとて子供を棄ると能はず、耻を忍びてかくは乞食せるなり。特に兄たる定一は强情ものにて、母の言をきかず、妹は生れながらの跛にて碌々歩するともかなはず、あはれ若しこの定一をだに世話したまはらばと、涙ながらに賴みければ、氏は之を諾したるが、彼の母は定一の慣るゝまで晝は出でゝ食を乞ひ夜は大師堂に眠り、五月十一日となりて歸りゆけり。是實に氏が孤兒院設立の第一動機なりとすべし。



岡山孤兒院の幼年及少年者

後一年を經て母ツチは衣類を持ち孤兒院を訪問せり。かれは直ちに國許に歸り、程なく妹娘を連れ或農家に縁づき兒島郡某村に居るとて服裝容態も一變せり。定一見て「如何やら聲は母さんに似て居れど違うやうな」と母子相見て泣けり。氏は此時始めてかゝる孤貧兒を救ふは唯その子一人を救ふのみにあらず、一人を救へるために即ち母子三人を救へるなりと悟り、一層孤兒教育事業の社會に關係深きを感じたり。

かくて氏は孤兒院を設立せり、幾多の困難に遭遇せり、明治二十二年一月十日多年胸底に藏ひたる問題を決定し、六年間學び得たる醫書に石油を注ぎて之を燒盡して決を表し、全心を孤兒院事業に抛てり。是に於て、胸中苦悶無く、外に友人の注告も止みぬ。しかも妻女は此時泣き、友は此時悲しみ、世人は發狂せりと評せしが、氏は始めて心裏にいひ難き幸福を感じたりといふ。實に此に至れるには、一年半の至難なる苦悶境界を經たるものなりき。此決心なかりせば或は中途にて挫折せしやも計らざりしなり。

二十八年は孤兒院に取りて一大厄年なりき、維持の難關を通過する方法に加へて、虎列拉の襲ふ所となり、石井氏これを患ひ、しかして妻君は不治の病に永眠す。石井氏曰く、「是予にとりて孤兒院にとりて空前の困難にしてまた絶後ならん、而して吾が岡山孤兒院は此困難に由て實に三百の團躰は眞に骨肉啻ならざるの親を結べり、予は之に由て生涯忘るべからざるの默示を得たり」と。至誠鬼神を動かす、是に至て感動涕涙の催すものあり。

設立以後收容せし孤兒は四百五十名を超え、現今生徒二百三十七名事務員教師實業部員世話人寄宿者院役者の家族を併せて二百八十五名の一大家族なり。

養育部に茶臼原幼年部、少年部、青年部、女子部あり、音樂部あり。教育部あり。實業部あり、（理髮、活版、

農業、精米、等）組織的整備す。前揭の圖は、日向茶臼原農業部の寫眞よりとりしものにて幼年者及青年者なり、幼年者は茫漠たる原野に天然敎育を受けしむる方法にて現今部長一人、世話人三人、生徒二十六名（男十三人女十三人）農業部の傍に於て牛馬雞犬を友とし遊戯三昧に日を送り十一二歳に至りて岡山に連れ來り少年部に入れて小學敎育を受けしむるなり。

岡山孤兒院の概要は此の如し、吾等は石井十次氏の如き至誠事に從ふものを觀ては實に敬虔の念を生じ、孤兒に對しては同情の感禁じ難きものあり。雙親恙なく在して膝下に侍するを得て、その恩愛に浴するの兒女、安靜幸福なる家庭の參考に供すべし。

○婦人の植物採集　植物學の碩儒理學博士伊藤圭介翁の孫良子女史は尙妙齡の女性なるが、昨年中清國芝罘に渡航し、熱心に同地方の植物を採集し、數百品を得、過般歸朝し同好の專門家と共に其植物研究の結果を世に發表すべしといふ。婦人の身にて遠く海外に赴き植物採集をなせるは之を嚆矢となすべく、學術研究と女性との關係上注目すべき事なり。

○沖繩縣の孝婦　沖繩縣島尻郡鳥島の糸數うたは天性溫順にして父母に孝に、嫁して後は舅姑に事へ、寡婦となりて子女の敎育に厚く、操行二十年一日の如く感ずべきものあり、此程知事より賞狀賜金あり。

○女子敎育に就て　吉村寅太郎氏が敎育公報第二百九號に說けるものあり。要旨に曰く、

下等社會の女子敎育法は、及ぶべきだけ直接に實利實益あるものを第一に授け、文字の敎を第二に置くべし。厭ふべき職工生活の弊風を改むることを得む。」

中等社會の女子敎育法亦た實地應用を主として今日の生活上に密接せしむべし。現時の弊は空理空談に流るゝの傾あれば之を除くを要す。嫁期に先だちて、獨力生活し得る程の手藝、職業を學ぶを要す。

上等社會の女子にもまた實地應用を主とし、婢僕管理の方法は殊に授くべきもの。

現今の女子は運動の少きため躰格不良なるゆゑ改善の一方として盆踊の如きを改良したる踏舞を用ゆべし云々。

要は實際的教育の方法をとれといふにあり。

○農家の細君　とは阿野仁平氏の著にて牛込神樂町池田商店より發刊せる、家庭的必要の書、婦道家政保險衛生より育兒家庭教育年中行事養蠶雞蜂漬物料理製法に至るまで二十三章に分說丁寧農家の細君の名實にその實にかなへり、（價參拾錢）

◎奠都祝賀

今上陛下東京に奠都三十年の祝賀の典は明治卅一年四月十日午前九時三十分宮城二重橋外廣塲に於て擧行せられ、聖上皇后兩陛下市民の請願を納れたまふて臨御あり。市中は山車球燈餘興行列等花開くの時、人まさに與ぜるの際、此祝典あり此盛式あり、紀念すべき佳節一ツを增せりといふべし。

瓜生岩女の傳記

前々號に於て瓜生岩女の傳記出板の事を報ぜしが藤井玄溟氏の著にて築地二丁目なる日本赤十字發行所より出でたり。（價二十錢）全篇を、何人ぞ瓜生岩とは、庭訓。感化。矯風。養育。廢物利用。征淸の役。吊魂。小山の靈塲。救恤。賞勳。最後。其子及其孫。人物。の十四章に分ち、具にその人物品性事業傳記を錄せり。

其事業の要を記すれば福島縣下墮胎の弊風を一洗して、洽く父母たるの道を知らしめ、養育事業に竭して幼老を愍み、廢物を利用して窮民に施し、施餓鬼を行ひて死者を吊ひ、雪鞋を募りて遠征の士を慰め、善を勸め惡を化し、終に上は九重の天眷を得、下は世道人

心の風化に至大の効をいたし、遺業は瓜生會の組織を留めて長く慈善事業の基礎をつくる。其人物は性質温和にして、一種犯すべからざる堅確の氣あり、風采は脊低く髪黒く鼻高く眼涼く、頬の両邊常に一種慈愛の波を湛へ、衣は綿服を着け髪は藁にて結び、外出には猿袴を穿てりといふ。

文政十二年五月を以て福島縣耶麻郡熱鹽村渡邊氏に生る、家は世々農を業とし父母兄弟皆忠實温良の家庭なり、幼にしては稍魯鈍なりといはれしは、實にその大成を意味せしものなるが如し。十四歳の春より會津侯の侍醫山内春龍の家に就きて文字裁縫起居禮節の教を受け、傍ら育兒の道を聽く、山内家は家風正しきを以て夙に藩中に聞えたりといへば此感化大に力ありしなるべし。十七にして會津藩士瓜生氏に嫁し、一男三女を擧げ三十四にして夫を亡ひ、爾後四十年畢生の事業として慈善の事に從ひ廿九年に七十三歳を以て長逝せり。



慈善家瓜生岩

岩女は信仰の人なり、賢徳の人なり、此の如き婦人此の如き人物事業は眞に之を書に傳へて弘く社會公衆の模範に供すべきもの、此書題して明治の女傑慈善の泰斗瓜生岩といふ、寔にその實を得たるもの仔細は宜しくその書に就いて視るべし、吾等は

此の如き美しき人の傳記を家庭に推薦るを喜ぶものなり。

長持に春かれゆく小袖かな　西鶴

夏衣流行

婦人向

三井呉服店の報道に依て夏物婦人向流行呉服物の状況を記すれば、

一先づ重なるものは紋織御召及縞御召の類にて單衣地として第一着心宜敷く變りものにては透織風織御召なるべし値段は紋織御召にて拾四五圓位其他は拾圓内外なり。

一絣類も單衣用には至極粋なるものにて結城紬の紺がすり及絹久留米を上等とし薩摩、御所、久留米も不相變評判よろし、尚小供向には友染絣類、御召類、及久留米の紺がすり等なるべし。價は結城紺絣絹久留米は拾圓以上拾五圓まで、薩摩絣四五圓位、御所、久留米は上等ものにて三圓までのものなり。

一單衣縞ものにては風通織、銘撰、節絲、壁絲、平御召、新御召、中形、青梅、玉川縮等上下を通じて需要多し、相場は風通織十二三圓、壁絲は拾圓前後、平御召十一圓位、銘撰節絲四五圓位但銘撰紺がすりは五六圓前後、新御召、中形青梅、玉川縮は三圓迄のものなり。千代田縮、柳川上布、玉川縮、晒縮などは、暑中の進物用に供して重寶なるもの、價は五六十錢より貳圓迄なり。

一薄もの地にては紋上布本上布を最上とし、絹上布、越後上布、透綾、明石縮、壁上布、帷子越後、奈良、近江等なるもの、本上布は最上八十五圓より以下拾五圓位まであり。紋上布は十圓前後、絹上布、越後上布、明石縮は八圓前後、絽縮緬、絹絽中形は常衣に工合よろしく、代價は貳圓前後なり。

一丸帶は繻絽、友仙絽、紋絽、献上朱子等にて價十二三圓以上十五圓迄、明珍單帶は十三圓前後なり。

同　男子向

一羽織地縞ものなれば秋田織、壁絲織、壁市樂、平御召、銘撰、節絲等にて秋田壁絲、平御召は八九圓以上、銘撰節絲は四五圓位、夏羽織用には縮絽、明石縮紗等代價八九圓、絹上布、壁上布は三圓以上五圓前後、無地ものにては絽斜子の黒五ツ紋も目下流行す。尚縞染絽單羽織は至極徳用にて價九圓位。

一縞御召壁市樂、壁絲織は單衣ものには最上にて價二三圓位、結城紬は十圓前後、其他は前述の結城紺絣、絹久留米にて銘撰、節絲は大凡五六圓位、絹セルは富岡絹絲紡績にて織上げたるものなるが、紳士向には重寶なりとし、價は五圓より十圓位までなり。

一帷子地にて本上布はいふまでもなく越後縞及絣、奈良縞、八重山上布、

芭蕉布等大に好評なりき。錆縞越後も昨年來大に流行せるが價は三四圓より十圓なり、奈良は二圓前後、擬越後は價二圓位にして正眞越後と差別なし、進物用に適す。

一帶地は絽綴織、綴織、和蘭織等世に高評あるものなるが、其他博多袋織、紋博多、三ッ折博多等價十七八圓より五六圓まであり、なほ白縮緬兵兒帶は〆加減よく、品は七八圓の處なるべし。絹紈の兵兒帶は昨年來大に流行せるものにて價は壹圓以上貳圓迄位なり。

口繪の解

愛の使

天の愛の使よ、地の愛の使よ、あゝ人の愛の使よ。純潔無垢天眞の兒容を露はし、高く天をのぞみ一矢天を指して、愛を呼ぶなり。愛の兒よ、汝は世に平和をもたらす、時に春をもたらす、草木に花をもたらす、家庭の和樂もまた汝が天より呼び下して與ふる所なり、あはれ愛の兒よ、汝は人々の懷に入れよ、家々の戸をおとづれよ、汝ある所には長へに平和あり、春あり、花あり、われは汝と共に居らむ、女性もまた長く汝と居らむとを願ふべし、あゝ愛の兒よ、愛の使よ。

寄書

最大の幸福

京都　本末吉山

金言に所謂己れの如く他人を愛すべし」とあり然り世間廣しと云へども之れ皆同胞なり相愛し相助けて眞誠なる至善に到達せんこそ人生の目的ならめされど世には極端なる自利的競爭をこととなし嫉視狐疑爭鬪をなすあるもの多し余は互ひに相愛し愛せらるゝ善意の友と交はるを大なる幸福とす。されど最も大なる幸福は和氣靄々たる一家族の團欒なり何となれば愛の樂園なり協力の標本なればなり常に其利害を共にし名譽を共にし隨つて其目的を同じうし針路を同じふす一人の不幸は一家の不幸にして一人の幸福は一家一家族全體の幸福なり豈に樂しき極みならずや嗚呼愛の一天地

ゐざりの乞食

信州　木内翠陰生

風寒く今にも雨の降りなんとする日安藝の國加茂郡西條町より上瀨郡となんいへる處に至らんとする途中(ゐざり)の乞食其妻と娘とに伴はれ人

家ある處に至ればいとあはれなる聲にて「ドウゾ此イザリを御助け下サエ」といひつゝ左右の手に下駄の如きものを握り之れに依りて匍匐し人家なき處に至れば其の妻に負はれて片ゆくを見る七條標阪となんいへる處の或る茶屋に立ち寄りしばしやすらひ居たるに此乞食の娘古びたる油壺の如きものを携ひ來り是れに酒一杯賣りてよといひければ其茶屋の妻出で來り誰に飲ますにやと問へば「トヽサン」にと答へけりかく風も寒く雨も降りなんとするに其の身にまとへる衣の薄くして破れたるをも顧みず猶酒を飲むか否飲む事を得るかとても三日乞食をすれば忘られぬといふはげにさる事にや

猿夫婦の間を和らぐ

阪鶴鐵道線路中満尾隧道(攝津の國有馬郡名鹽村地内)掘鑿に從事せる坑夫の内なる夫婦のもの吹けば倒れんばかりの陋屋に住みけるが何故にや其食料として貯ひ置きたる白米限定よりも早く減少する事屢々なりしかば其夫之れをあやしみこは全く妻が竊かに他の者に賣り渡し其價を以ておのが好めるものを求むるに相違なしとて再三再四其妻を責めしかど妻は素より其覺えなきゆゑさるいやしき行なしと答へつゝ深く不思議の思ひに沈み居たりしが其夫益々怒に堪えずやありけんある夜痛く其妻を折檻し將に離縁せんとするに至らんとする折しもあやしき聲こそ聞こえけれ、急ぎ「カンテラ」を點して之れを見れは一疋の猿口一杯に米を含み一疋の猿手を以ては其口を押し開き其米を吐き出さしめんとして互に爭ふ處なり是に於て其米の減少する所以相分り互に笑ひ合へりとぞ

記者附記　此他荒川梧陰、北但の天涯生、吟月生等々十数子より寄せられし原稿あれど、皆唯理を言はるゝのみにて事實を報ぜられざるため遺憾多し、社告閲覧の上實際の報道を寄せられんことを希望す

社告

寄書募集

左の條項に據りて寄稿を歡迎す

一地方風俗習慣上につきての所見若しくは所感

一其地方に於ける時々の見聞錄

一家庭に關する自他の經驗談若くは見聞記事

一兒童遊戯の種類

一家庭日記の類

一童謠俚歌

總じて事實上の記事たるべし、文章は短きを可とす、

熊澤蕃山

塚越芳太郎著

紙數五百六十四頁
定價八十錢
郵稅八錢

豪才を以て一世を睥睨したる物徂徠をして、人材には即ち蕃山、學問には即ち仁齋と曰はしめ、又仁齋の道德、蕃山の英才、余の學術と合して一となす、即ち聖人と謂ふべしと曰はしめたるものは、實に彼蕃山に非すや。江戶三百年を貫流したる反面思潮の源頭に立ち、經世の才、濟民の畧、滔々たる儒學者流中に於て別に一頭角を擢でたる者は實に彼蕃山に非すや蕃山の蕃山たる所以は、江戶政府の大政策たる鎖國弱諸侯主義の流弊に對して、之が變通の策を畫したるに在り。特に私德公德の最も尊ふべきあり、出處進退の仰て師とすべきあり。其生涯は永く士人の標式たるに堪ゆ。若し夫れ時代の變通を要すべき點よりして之を觀ん乎、今の時は多少蕃山の時の如き也。今日の學者政治家の世に處するを見るに、又彼蕃山の如きものを思はざる能はず。然らば即ち此の書の今日に出る、必ずしも時事の萬一に補なきにしもあらざる可し。

發行所　東京市京橋區日吉町　民友社